にちぎん

2014 NO.37 春

インタビュー　扉を開く

隠れた魅力に光を当て共感を呼ぶ
——「くまモン」に込めたもの

放送作家・脚本家 小山薫堂

地域の底力

近江八幡市 滋賀県
近江商人の発祥の地、滋賀県近江八幡市に根づいた
自立自助のまちづくりと「三方よし」の精神

対談　守・破・創

完成と思えば成長なし
青木 功 プロゴルファー
岩田規久男 日本銀行副総裁

トピックス

新日銀ネット 第一段階開発分の稼動開始（2014年1月） ほか

お金のにおい

乃南 アサ

絵・江口修平

今から三〇年くらい前のことだろうか。いわゆる「悪徳サラ金」が深刻な社会問題になっていた時期がある。法外な金利はもちろんのこと、返済を迫る脅迫まがいの電話、執拗な嫌がらせなどについて新聞やテレビは連日取り上げ、私自身も近所に建つアパートの一室に「金返せ」「泥棒野郎」「ブッ殺すぞ」などといった紙が無数に貼り付けられているのを見つけて、ぞっとしたことがあった。

そんなある日、ワイドショーにサラ金の社長がゲスト出演した。見るからに人相の悪い男は当初は余裕のある表情で「私は人助けしているんですよ」などと笑っていたが、やがてキャスターからの辛辣かつ執拗な質問に怒り出し、突如として手元のトランクを開けると、そこにぎっしり詰まっていた一万円札をスタジオ中にばらまき始めた。確か「金のあるものが勝つんだ」「自分の金をどう使おうが俺の勝手だ」というようなことを叫んでいたと思う。

狂ったように札をまく男の姿は、テレビ画面を通して見ても不快極まりもないものであり、何とも寒々しい気持ちになったことを今もはっきりと記憶している。

ところで最近は「お金のにおい」のする人がわかるようになってきた。職種に関係なく、そういう類いの人がいる。彼らは同じにおいをさせている仲間を敏感にかぎ分ける。そして、必ず似たもの同士がグループになって、常に新たな金儲けの相談をしているのだ。彼らは自分たちの「におい」には気づいていない。無論、裕福だからと言って、そんな連中ばかりであるはずがない。むしろ「お金のにおい」をさせている人たちには、逆に本当のお金持ちの持っている雰囲気は決して身につけられない。

かつてワイドショーで見たサラ金の社長も、「お金のにおい」をさせている人たちも、要するにお金に魂を売り渡した人たちなのだろうと思っている。お金が恐ろしいと思うのは、それなのだ。お金には、ものすごい魔力がある。人の怨念を吸い込む。その結果として、人間の人生を狂わせ、時として簡単に命さえ奪う。だから、なくてはならないと分かっていても、いつも怖いと思っている。だが、うまくしたもので、そんな風にビクビクしている人間に対しては、お金も最初から魔力を発揮するほどには集まって来ない。

のなみ・あさ●作家。1960年東京生まれ。早稲田大学中退後、広告代理店勤務などを経て、作家活動に入る。『幸福な朝食』（1988年：日本推理サスペンス大賞優秀作）、『凍える牙』（1996年：直木賞）、『地のはてから』（2011年：中央公論文芸賞）をそれぞれ受賞。他に『ボクの町』『風紋』『晩鐘』『鎖』『嗤う闇』『しゃぼん玉』『風の墓碑銘（エピタフ）』『ニサッタ、ニサッタ』、エッセイ集『いのちの王国』など著書多数。巧みな人物造形、心理描写が高く評価されている。

にちぎん

SPRING 2014　NO.37

CONTENTS

2 エッセイ／“おかね”を語る
お金のにおい　作家 乃南アサ

4 インタビュー／扉を開く
隠れた魅力に光を当て共感を呼ぶ
――「くまモン」に込めたもの　放送作家・脚本家 小山薫堂

9 地域の底力――滋賀県近江八幡市
近江商人の発祥の地、滋賀県近江八幡市に根づいた
自立自助のまちづくりと「三方よし」の精神

16 対談／守・破・創
完成と思えば成長なし
プロゴルファー 青木 功
日本銀行副総裁 岩田規久男

20 日本銀行の支店建物［7］
日本銀行旧岡山支店　日本銀行文書局技師 中村茂樹

24 FOCUS → BOJ ⑩ 日本銀行大阪支店の仕事
「西の母店」として全国を支える

28 日本銀行のレポートから
「地域経済報告」（さくらレポート）―2014年1月―

32 トピックス
新日銀ネット 第一段階開発分の稼動開始（2014年1月）
2013年11月より、新しい「国庫金OCR事務」をスタート　ほか

35 AIR MAIL from London
過去と未来が息づくロンドン

表紙のことば

日本銀行那覇支店は、昭和四十七年（一九七二）五月、沖縄の本土復帰と同時に開設され、ドルから円への通貨交換という歴史に残る大事業に取り組みました。

今回表紙に掲載した現在の店舗は、二代目として平成十九年（二〇〇七）十二月に竣工。那覇市松山から同市北部の再開発地区である那覇新都心の一画、おもろまちに移転したものです。「おもろまち」という地名は公募により採用されたものですが、「おもろ」とは沖縄の古い歌謡のことで、沖縄方言の「思い」が転訛したものと考えられています。

琉球瓦の赤い屋根が象牙色の琉球石灰岩に映える建物は、地上三階建てで、地元ゆかりの琉球ガラスも彩りを添えています。また、南国の強い日射しを遮る深い軒や、太陽光発電や水の再利用設備など省エネ対策も採り入れられています。

同支店には、営業時間中に自由に見学することができる「展示広場」があり、訪れるお客様を、玄関のシーサーが出迎えています。

表紙・画 北村公司

INTERVIEW

雇を開く

放送作家・脚本家

小山薫堂

Kundo Koyama

「料理の鉄人」などのヒット番組の放送作家、アカデミー賞に輝く映画『おくりびと』の脚本家、そして熊本県キャラクター「くまモン」の仕掛人など、ジャンルを超えた幅広い活動を展開している小山薫堂氏。

数多くのブームを生み出すアイデアの基本は、「サプライズ」と「和(あ)える」。自分たちが気付かなかった魅力に光を当て、組み合わせることで、新しい価値を生み出す。くまモン誕生からお札を巡る話題まで、共感を多くの人に広げる小山マジックの一端を語っていただいた。

文 谷 隆一　写真 野瀬勝一

隠れた魅力に光を当て共感を呼ぶ

――「くまモン」に込めたもの

くまモンブームは県民への仕掛けから生まれた

――小山さんが手掛けた熊本県のキャラクター「くまモン」の人気が続いています。日銀熊本支店の調査によれば、二年間で一二四四億円の経済効果があり、これは近年のＮＨＫ大河ドラマを大きく上回っています（注1）。

小山　日銀に数字を出してもらうと、すごくリアリティーがあります。僕はくまモンが世に出るきっかけを作っただけですが、当時はここまでになるとは思っていませんでした。くまモンが大きく成長した背景には、地元の皆さんの意識の変化があったと思います。

誕生したのは二〇一〇年、九州新幹線の全線開業（注2）に向けたキャンペーンのときです。熊本にとって待望の新幹線ですが、開業が近付くにつれ危機意識も強くなってきました。何もしないと、観光客が熊本を素通りして鹿児島に行ったり、地元の若者が福岡に出て行ったりしないか、という心配です。そこで県庁から僕にキャンペーン展開の依頼が来ました。

僕が考えたのは、「このキャンペーンをお祭りにしよう」ということでした。熊本の良さを外に発信するだけでなく、自分たち熊本県民の心が内側に向くような仕掛けをしてみようと思ったのです。

――「内側」といいますと。

小山　県民自身が地元の魅力に改めて気付くことが一番価値のあることだと思うんです。「観光」は、地域活性化のための魔法の杖のように言われます。そして「うちにはこれがあります」と観光地を声高に叫ぶ。阿蘇や天草はいいなと思います。でも、観光に向かない地域まで「何が何でも観光だ」となると、それはちょっと違うんじゃないかと。

人だって、外向けに着飾ったり厚化粧するよりも、素のままの方が魅力的ということがよくあります。そういう素顔の魅力に県民自身が気付くことが大切なのではないか。中途半端に観光にお金を投じて何万人か来ても、その経済効果は一部の人にしか及ばず、そのとき限りの効果でしかありません。むしろ、お祭り騒ぎが終わっても、県民が「熊本はよかとこばいね」と誇りを持てるようになる方が長い目で見て価値があるのではないか、その方が土地の本当の良さが伝わるのではないか、そんな風に考えたんです。

そこで仕掛けたのが「くまもとサプライズ！」というキャンペーンなんです。

――「サプライズ」とは、「当たり前と思っていたことが実はすごいことだと気付く」、そういうことですね。

小山　そうです。実はこれには個人的な体験があります。熊本の新市街という商店街でタクシーに乗ったときのことです。おばちゃんの運転手さん、タクシーが走り始めているのにメーターを倒さなかったんです。それで「メーター倒し忘れてますよ」と言ったら、運転手さん、振り返ってニヤッと笑いながら「知っていますよ。この先に必ず赤で止まる信号があるんです。その信号で止まったらお客さんいらいらするでしょう。だからその信号を越えてからメーターを入れさせてもらいます」。これは僕にとって大きなサプライズでした。それで「その優しさ、お客への思いやりこそが旅の思い出、財産になる」、そんなことを

©2010 熊本県 くまモン

こやま・くんどう● 1964 年熊本県生まれ。株式会社オレンジ・アンド・パートナーズ代表取締役社長兼 N35inc 代表。株式会社下鴨茶寮代表取締役社長。東北芸術工科大学デザイン工学部企画構想学科長。日本大学芸術学部放送学科在学中に放送作家としての活動を開始。「カノッサの屈辱」「料理の鉄人」など数々の名番組を手がける。2008 年公開の映画『おくりびと』では脚本を手がけ、第 81 回アカデミー賞外国語映画賞、第 32 回日本アカデミー賞最優秀作品賞などを受賞。現在は、テレビ、ラジオへの出演のほか、雑誌のエッセイ連載、小説、絵本翻訳、作詞など幅広い執筆活動を展開している。主な著書に小説『フィルム』(講談社)、絵本『いのちのかぞえかた』(千倉書房)、『小山薫堂　幸せの仕事術―つまらない日常を特別な記念日に変える発想法』(NHK 出版)など多数。また、その企画力を請われ、熊本県地域プロジェクトアドバイザー、日光金谷ホテル顧問、企業・地域のキャンペーンや商品開発のアドバイザーなど活動分野は多岐にわたる。

話したら、運転手さんが「この辺りのタクシードライバーはみんなそうですよ。走り始めてある程度スピードが出ないとメーターは倒しません」と教えてくれたのです。それを聞いて、ますます嬉(うれ)しくなりました。

――お客さんをもてなそうという地域のカルチャーですね。

小山　すばらしいカルチャーです。東京ではあり得ません。ささやかですが、こうした嬉しくなることを県民が一つずつ身の回りで見つけていくと、熊本が変わると思いました。地元で当たり前と思っていたことに他県からの来訪者がびっくりする。びっくりされることで、県民も「これってそんなにいいことだったんだ」、「熊本っていいかも」と思うようになる。そういう循環が生まれるといいな、という思いで「くまもとサプライズ」を企画したんです。

――そこで誕生したのが「くまモン」ですか。

小山　実は、くまモンはおまけとして付いてきたんです。キャンペーンのロゴを作ったときに、デザイナーが「一緒にマスコットキャラクターも作りました」と言って持って来てくれたのがくまモンです。びっくりマークの代わりにくまモンが驚いてみせる、そんな県民の身近な幸せの発見のお手伝いをするアイコンキャラクターと思っていました。

そうしたら、県庁の人たちがどんどん盛りあがっていきまして……。

――県庁の方々は、役所の殻を破るような試みを盛んになさったようですね。

小山　そうですね。くまモンは、最初は県内の幼稚園、保育園回りから始めました。やがて関西各地に出没したり、ブログやツイッターで情報発信したり、ユニークな名刺を作って配ったりと、さまざまな取り組みをして、メディアにも随分取り上げられました。

蒲島郁夫(かばしま)知事や、タレントのスザンヌさん（注3）と一緒にイベント参加することも多く、公務員らしからぬ仕掛けづくりが数々行われました。

「くまモンを探せ大作戦！」（注4）という企画では、くまモンが失踪という想定で知事が架空の記者会見を開き、その様子を動画で公開しました。知事・くまモン・スザンヌさんが吉本新喜劇で「ズッコケ」もやっています。企業とコラボレーションし、くまモンを用いた商品が多数作られたのも画期的なことです。

こうした仕掛けをしたのが熊本県庁の「チームくまモン」。「初めて」「唯一」「知事自ら」をキーワードにできた県庁職員のチームですが、彼らがリードして、県庁の部署間の垣根を越えた活動を展開してきた、それが成功の原動力だと思います。今ではくまモンの活動の場も広がり、熊本県の「営業部長」に加え「しあわせ部長」も兼任しています。

――「チームくまモン」の活動記録を拝見すると、小山さんの著書を相当熟読され、そこをベースに戦略を練っておられるようにうかがわれますが、何が職員の方々の意識や思考を変えていったのでしょうか。

小山　それはその人自身の成功体験だと思うんです。サプライズを誰かに仕掛けて楽しいと思ったら、またしようという気になります。一度成功体験を味わうことに

よって、自分なりに今度はもっと大きな成功をしたいと思ったり、もっと複雑なサプライズをしたいと思う。これは本能だとしか言いようがないと思うんです。使命なり、仕事なりを自分の中で誰かの幸せという価値に変えて、それを自分の楽しみとして味わうということが一番大切なのかなと思います。

注1　日本銀行などが調査した近年のNHK大河ドラマによる経済波及効果は、最大値が二〇一〇年「龍馬伝」の五三五億円（高知県）、直近一一年間の平均値は二〇五億円となっている。
注2　九州新幹線の鹿児島ルート（博多―鹿児島中央）の開通は二〇一一年三月。博多・鹿児島中央間を約一時間二〇分で結ぶ。
注3　熊本県出身の女性タレント。二〇〇八年十一月に「熊本県宣伝部長」に就任した。
注4　蒲島県知事から名刺を一万枚配布するミッションを課せられたくまモンが大阪で失跡したという設定を、知事が架空の緊急記者会見を開いて告知。「くまモンを探して」と呼びかけた。

「和えて」新しい価値を創造する

――お話をうかがっていると、関係者の一人ひとりに思いが浸透することが大切なのだと感じます。小山さん自身が、チームといいますか、人の「和」を大切にされてきた結果のようにも思うのですが、いかがですか。

小山　そうですね。いま、「和」とおっしゃいましたが、「和風」の「和」は、和みの和であり、和らげるの和であり、和えるの和だと思うのです。狭い国土の中で自分たちの資源だけでやっていけないので、いろいろな国の良いものを取り入れて、それを改良しながら新しい価値を生み出す。そのことによって日本という国は生き延びてきた。これが日本文化の成り立ちだと思います。

こういう「自分たち流にアレンジをする」、「ほかのものと和えて違うものを作り出す」ということを自分の仕事の中でもやっているのかな、という意識はあります。自分だけで何かを作り出すのではなくて、いろいろな人の力を借りたり、人の思いを集めながら一つの新しい価値を作り出していく。そういうイメージです。

――ところで、人の「和」という点では、最近日光金谷ホテル（注5）の顧問をされたり、一八五六年創業という京料理の老舗下鴨茶寮（注6）の社長に就任されるなど、事業、組織へのコミットを強めた活動もされていますが、どういったことを狙っておられるのですか。

小山　日光金谷ホテルの場合は、最初は純粋にお客だったのです。「いいホテルだな」と気に入ったのですが、ここをこうすればもっと良くなるのに、と思いました。それで「勝手にテコ入れ」として、ファンの目線から提案をしたことが始まりで今に至っています。

一方、下鴨茶寮、これは、僕にとってはテレビ局を買うぐらいの意味合いを持っています。というのも、日本料理、とりわけ一つのブランドとしての京料理は、マスメディアに匹敵する発信力、伝えていく力を持つと思っているからです。

これからの時代、和食は世界で絶対に注目を集めるでしょうし、人が集まる場として、文化を発信する拠点になると思います。

実際、先日、フランシス・コッポラ監督（注7）が来日されたときにも、ワインと料理を下鴨神社の中で味わう企画を開催したところ大変喜んでいただきました。コッポラ監督が興味を持って足を運んでくれたのは、下鴨神社とつながっている料亭の企画だということがあると思います。つまり、伝統や文化には人を引きつけるマグネットがあるわけです。

こんなふうにいろいろな人が集まれば、出会いが生まれ、コラボレーションが始まります。そして、また新しい何かが生まれていく。そういう場所は、まさにメディアとしての価値を持っていると思います。

――世界に向けた日本文化の発信という点では、二〇二〇年の東京オリンピックという大イベントが待っています。どのように捉えておられますか。

小山　東京オリンピックは、熊本にとっての九州新幹線と同じだと僕は思っています。

つまり、人々の気持ちがまとまるという点では最高のイベントだと思います。しかし、外国人観光客等の経済効果となると、オリンピックの観戦チケットの数には限りがあり、地域的にも限定される

のではないかとも思います。むしろ国内外の観光客が東京に集中してしまい、地方にとっては経済的にマイナスになってしまう可能性もあると思います。実際に、ある有名温泉地の市長さんが、オリンピック需要を期待して前回の東京オリンピックのときの新聞をひもといたところ、当時温泉客は激減したとの記事ばかりだったそうです。

ですから、オリンピックでいかに東京を盛り上げるかということではなく、この機会を利用してほかの地域まで人を運んだり、拡散させたりするような工夫をするべきではないかと思いますね。東京オリンピックではなく、「ジャパンオリンピック」にするべきだと思います。

――先ほどの和の話で言えば、東京と地方がうまく和えられるか、ということですね。

小山　そうですね。両方の文化が合わされば、日本文化の価値がさらに高まります。東京や京都はそのために日本のショールームにならなければいけないと思います。

感謝を伝えるようにお金を使おう

――ところで、著書で「勝手にテコ入れ」をよくやるのだと書かれていますね。いろいろなサービスや製品などに触れるたび、「こうしたらもっと良くなるのでは」と自分なりに考えてみるということですが、日本銀行について何かご意見はありませんか。

小山　日本銀行の製品というのは紙幣ですよね。これは持っていない人はいない。こんな商品は他にないと思いますね。

僕はこれは一つのメディアだと思います。みんなが持っていて注目するわけですから。不謹慎かもしれませんが、これを使った面白いキャンペーンを作れそうな気がします。

たとえば、お金の行方を追えるアプリがあったら面白いだろうな、と思います。お札の記番号を入力すると、そのお札がどんな人、どんな土地を経由して現在に至っているかが分かる。

お札の流通量を考えれば、実現は難しいでしょうけど。そういうことができれば、お金への接し方が変わる気がします。自分が九州で使った一万円札が北海道へ行っていたと分かれば、ちょっと想像するじゃないですか。「何であっちへ行ったんだろう」、「どこでどういう使われ方をしたのだろう」とか。そういうことを思うと、実際にお札を出す時に「次はどんな人のもとに行くかわからないけど、おまえも頑張れよ」といった気持ちになると思うのです。要するに、お金を大切にするようになります。

実は僕はいま絵本（注8）を書いていて、それは、ある日突然宇宙人がやってきて人々からお金を奪ってしまう、という物語です。お金を取られた人々は物やサービスをやり取りするときにお金の代わりに拍手をするようになるのですが、これは「思いのこもった仕事に感謝の拍手をするような気持ちでお金を使おうね」というメッセージを子どもたちに伝えたくて書いています。

――非常にいいメッセージですね。「資金」という言葉は「志金」と書いた方がよいのではないかという人もいます。お金という形で、感謝や思いのやり取りがされるようになると良い社会が生まれるのではないかと思います。

今日はお忙しいなか、本当にありがとうございました。

注5　一八七三年開業の、現存する日本最古のリゾートクラシックホテル。本館などが二〇〇五年に登録有形文化財に登録されている。

注6　一九九四年に世界文化遺産に登録された京都・下鴨神社（賀茂御祖神社）に隣接する京料理の老舗。

注7　『ゴッドファーザー』で有名なアメリカ人映画監督。代表作に『地獄の黙示録』など。ワイナリーのオーナーとしても知られる。

注8　自身が初めて子ども向けに書いた絵本『パチパチのほし』が3月中旬千倉書房より発売。

（聞き手／情報サービス局長・丹治芳樹）

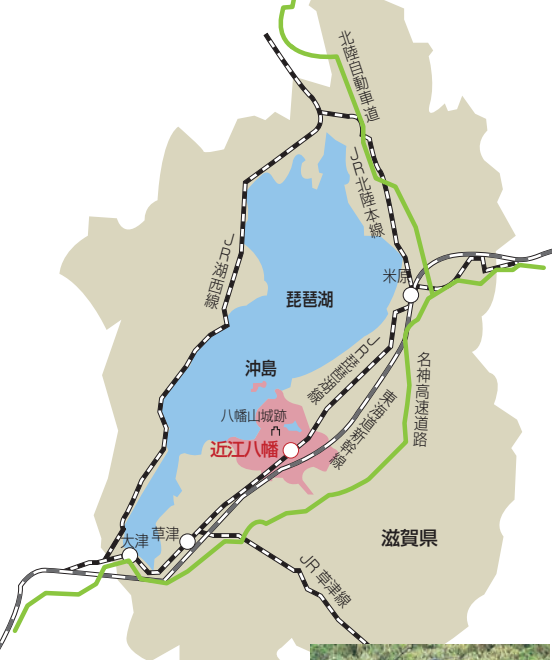
滋賀県近江八幡市

近江商人の発祥の地、滋賀県近江八幡市に根づいた自立自助のまちづくりと「三方よし」の精神

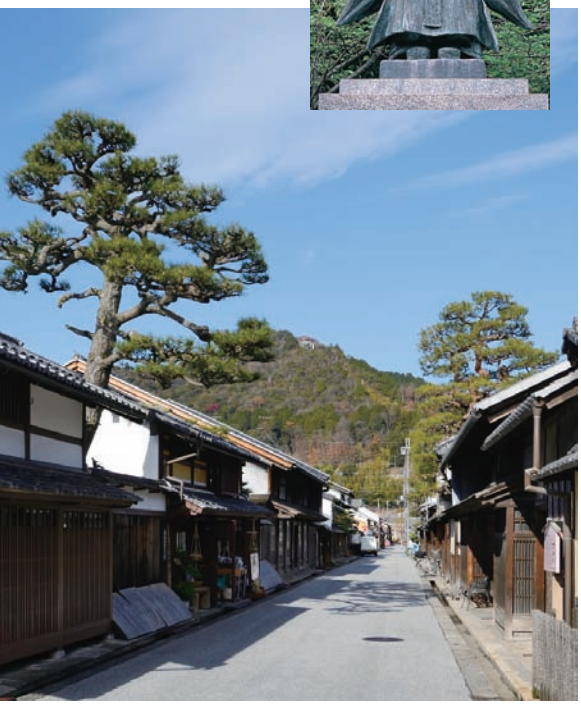
織田信長と豊臣秀次が基盤を築いた近江八幡市には、城下町の名残をとどめる美しい町並みと、琵琶湖周辺の水郷地域をはじめ美しい自然が残る。「おかげさんで」という言葉が日常で交わされる、近江八幡の人々の胸には今なお、古くから培われた近江商人の思いが継がれていた。

取材・文 山内史子　写真 野瀬勝一

桜の花が彩る、春の「八幡堀」



右／かつて城があった八幡山の山麓「八幡公園」には、豊臣秀次の像が建つ。



八幡堀周辺には江戸時代末期建築の豪商の屋敷をはじめ古い町並みが続いている。

今も確かに継がれる近江商人の精神

近江商人発祥の地である近江八幡市は、琵琶湖の南東、滋賀県中央部に位置する。この地が歴史の表舞台に登場するのは、天下統一を目指した織田信長が安土城を築城したことによる。その後、豊臣秀吉の甥の秀次が八幡山城を築城し、信長時代以来の楽市楽座のもとで、城下町や商いは栄えた。

八幡山城築城の一〇年後、豊臣家の跡継ぎ争いを巡って秀次が二八歳の若さで自決の運命をたどると、秀次が築いた壮麗な城も廃されたが、交通の要所、商いの拠点としての役割は残った。

その後、近江八幡は実質的に商人たちが中心となる自治都市として江戸時代を歩んでいった。殿様には頼れない、自分たちだけで生きねばならない。自立、自助の精神がいつしか育まれ、それがやがて全国に散る近江商人の礎になっていく。

彼らの心に深く刻まれていた理念は、「三方よし」。売り手よし、買い手よし、世間よし。自分たちだけがもうけるのではなく、お客さまが喜び、さらには社会に貢献できる商いを、というものだ。

質実もまた、近江商人の心得のひとつ。近江八幡市には昔ながらの瓦屋根が続く町並みが残り、かつての豪商の屋敷の一部は資料館として見学できる。いずれも構えは大きいが、表立って華美な印象は受けない。とはいえ、たとえば引き戸に大きな一枚板が使われているなど、よく見れば贅が尽くされているのが興味深い。

自立、自助、三方よし、質実。その精神が今なお継がれていると、取材を重ねながら追々気づくことになるのだが、その緒を与えてくれたのは、近江八幡市長の冨士谷英正氏だった。

早朝からエネルギッシュに市政に取り組む冨士谷英正市長。そのスタイルは就任以来、今も変わらず続いている。

一〇年に市長に就任した冨士谷氏は、思いきった行財政改革を断行している。まずは人件費を削減し、総事業決算対比で二三%から一七%へと縮小させた。単に職員を解雇したわけではない。保育園や給食センターといった、市が関わっていた施設の一部を民営化した結果だ。

さらには、幼稚園や保育園、学校、コミュニティセンターといった教育、文化関連の建物を集結。コミュニティセンターは学校と渡り廊下でつなげられ、災害時には避難施設になる。

「まとめた方が人が集まって賑わいが高まる。そして、絶対に安

くあがる。僕にも近江商人の血が流れているんでしょう。株式会社近江八幡、自治体経営も本質は企業経営と同じだと言ってるんです。がめつくもうけて、スマートに使う（笑）」

冨士谷市長は冗談めかして笑ってみせたが、コストカットにより生じた「もうけ」は、福祉・教育分野などに注がれている。

「大切なのはやはり、住みたいと思う魅力のあるまちをつくること。当市は高齢者のためのデイサービス、特別養護施設、老健施設などはかなり充実しています。ただ、財政にも配慮して、やりすぎにならないように歯止めをかけつつですが。一方、保育施設のキャパシティに余力をもたせるよう心掛けています」

冨士谷氏が市長になってから転入者が増え、人口は現在約八万二五〇〇人にまで増加。出生数も増え、嬉（うれ）しい悲鳴をあげている。

もっとも印象深かったのは、一般廃棄物処理施設建設に関するエピソードだ。通常ならば行政側が補助金を出し、候補地の住民に徹底して頭を下げ、なんとか話がまとまるものではないか。しかし、市長がとった策は逆だった。

「一般廃棄物処理施設を受け入れてもいいという自治会は、手をあげてください。そう、皆さんに投げかけたんです」

受け入れた場合、一〇年で一億円が自治会のまちづくりのために支給される。ほかにも利点はある。廃棄物は単なるごみではなく、焼却の余熱を使って発電や温水プールもできる資源エネルギーだ。そんな施設のメリットを、市は積極的に住民に宣伝してきた。果たして、三つの自治会が立候補したそうだ。住民の意見のとりまとめも、自治会が行った。

「一般廃棄物処理施設は、人間の経済活動になくてはならない存在。火葬場やし尿処理施設も同じです。それなのに、お金をもらったから引き受けるという発想は人間を悪くします。損か得かの世界なんて、味気ないでしょう」

効率に徹して改革を進めているように見えつつ、その裏には深い情が秘められていたと知り、思わず胸が熱くなる。

「行政がなんとかせい、は昔の話。皆さんはどうしたいんですか？　まずはそれを教えてください、と僕らは言うんです。行政も行動しましょう。そのかわり、皆さんも責任をもってくださいと」

（冨士谷市長）

「いいもの」を守ればおのずと商いになるとの思い

シビアにも聞こえるが、近江八幡市では住民たちが自分で考え、自ら行動に移した過去の実績があった。豊臣秀次の時代につくられた「八幡堀（はちまんぼり）（全長約五キロ）」の再生の取り組みだ。その名のとおり八幡山城の防御のために開削された八幡堀には、琵琶湖の水が直接引き込まれ、運河としての役割もあった。

琵琶湖南東岸を通る船はすべて八幡浦を経由しなくてはならないという秀次のお達し以来、近江八幡は流通の拠点となり、同時に多くの情報と物資がもたらされた。しかし、時代の変化や水位の低下とともに琵琶湖の水運は廃（すた）れ、堀の役割は失われる。

加えて明治期、鉄道が敷かれる際に、煙を吐く列車は街中を走って欲しくないとの意見が多数を占めたことが、後に大きく影響する。八幡堀から徒歩で三〇分近くかかる場所に建った駅を中心に新

しばしば時代劇の舞台となる「八幡堀」では、昔風の小舟に乗り、ゆるり景色を楽しむ観光客の姿も見られる。

八幡堀沿いは、観光客のみならず地元の人にとっても癒やしを与えてくれる散歩道。町家を利用したカフェなど、若い世代の注目も集めている。

しい町が広がり、城下町だった古い町並みや八幡堀の存在を知らないままに暮らす住民も増えていたのだ。

無用となった上、六〇年代にはヘドロの悪臭があたりに漂うほど水が汚れ、その対策として埋め立てに行政が動き出したのは自然の成り行きだろう。しかしながら、同時に「堀を埋めた瞬間から後悔がはじまる」という声が、地元の青年会議所からあがった。

「まちが今あるのは八幡堀があったからこそ。八幡堀はみんなのものだ」という意識が地元の若者の間で甦った。それなら、未来の子どもに歴史ある景色を残すために、自分たちで汗をかこうと、再生のための活動が始まった。

とはいえ、既に堀の埋め立てに向けて動き出した後のこと、すぐには行政や市民に受け入れられなかった。それでも青年会議所のメンバーが毎週八幡堀へ入って清掃を続けたところ、次第に市民の目が変化し、清掃に参加する人やその人たちに食べ物等を差し入れる人が増えていった。近江八幡の誇りを自らの手で取り戻す事業として、共感の輪が広がり始めたのだ。その結果、滋賀県は進みかけていた改修工事を中止し、国にその予算を返上することになった。

現在の八幡堀は、以前の状況が信じられないほどの明媚さである。風情あるその姿ゆえに、テレビや映画の時代劇の撮影場所として頻繁に使われ、大勢の観光客が日々訪れている。

すだれの材料ともなる、葦が生い茂る水郷地域。この地域の葦は上質で、かつて織田信長に献上されたことも。

近江八幡観光物産協会会長を務める森嶋篤雄氏。協会の事務局が置かれている登録有形文化財の「白雲館」を背にして。

実は近江八幡市は、〇四年に施行された国の景観法に基づき、最初に景観計画を策定した自治体だ。守るべき美しい景色は、大きく二つに分かれる。八幡堀を要として旧家が続く街中と、水郷や豊かな田園風景が広がる郊外のエリアだ。

水郷も、埋め立てて整備する話が持ち上がっていたが、こちらも景観は保たれ、今や葦が茂るなかを小舟で行く水郷めぐりも近江八幡観光の目玉のひとつに。

明治十二年（一八七九）創業以来、近江牛の販売や飲食店を手がける「毛利志満」を営み、現在は近江八幡観光物産協会の会長を務める森嶋篤雄氏が語る。

「このまちへの観光入込客数は、

近江八幡で育った以上は、次世代の子どもが住みたいと思うまちにしたいという「たねや」社長、山本昌仁氏。「まっせ」の代表として、新しいまちづくりにも取り組んでいる。

数年前から年間二五〇万人から三〇〇万人に飛躍的に増加しましたが、単純には喜んではいられません。観光客の満足度を考えたら、むやみに人数を増やそうとは思いません。まちの受け入れ態勢を超えて大勢のお客さんが来たらどうなるか。行ったけど大変だった、車は混んでいるし、停めるところはないし、見るところも見ないで疲れて帰ってきたわ、となりますね。だから、近江八幡の魅力を十分に感じてもらい、また来たいな、と思ってもらうためには、腹八分目が肝心なんです」

大がかりなイベントの開催、巷で人気のゆるキャラ、B級グルメを創り出す打ち上げ花火のようなアイデアは、観光関連の話し合いの場があっても自然と流される。景色と調和しない派手な看板も近江八幡では見かけない。

「仕掛けで宣伝するのではなく、あるものを少し磨かせていただいて、皆さまの目につくようにしようと。いいものをつくっていればやがて信用が生まれるはず。消費するような観光対策ではなく、今だけ良ければいいのでもなく、先々まで市民にも観光客にも愛されるまちでありたいんです」

人任せにしない まちづくりを目指して

そんな近江八幡流を具現化したのが、創業一八七二年の和菓子舗「たねや」だ。駅から離れた旧市街に建つ日牟禮八幡宮境内に、飲食、カフェも兼ねた「近江八幡日牟禮ヴィレッジ」をオープンしたのは、〇三年のこと。かつてこの地に暮らした、建築家ウィリアム・メレル・ヴォーリズ（注）が設計した邸宅も利用した試みだ。

たねや四代目を継いだ山本昌仁氏が語ってくれたその背景は、なるほどと思わせるものだった。

「駅のような近代的なものは、いつかなくなるかもしれない。でも、お宮さんは、絶対に揺るぎないという考えでした」

日牟禮八幡宮は正月ともなれば賑わうが、その頃はふだん、界隈の人通りが多かったわけではなく、「なんでこんなところに」との声も聞こえたそうだ。実際、しばらくは苦労が続いたが、「たねや」のおいしさと知名度があがるにつれ客足は伸び、洋菓子部門（クラブハリエ）のバームクーヘンの人気も相まって、現在では県内外から年間六〇万人もの客がこの店を訪れる。

山本氏は、まちづくりにも積極的に関わっており、一三年には「（株）まっせ」を立ち上げた。一〇年に旧近江八幡市と旧安土町とが合併したが、「まっせ」では双方を結ぶ自転車ルートを設け、観光客の散策範囲を広げようというプラン実現に動いている。企業形態にしたことで、物事がスムーズに決まるようになったそうだ。

「補助金だけに頼っていたら、がんじがらめになってしまう。しかも、なにかあれば行政の責任、政治の責任になる。でも、選んでいるのはわれわれなのだから、自分のこととして考えていかなければならない。人任せにしないまちづくり。これから絶対に重要になってくると思います」

「まっせ」の取り組みのひとつ

古くから近江商人の信仰を集めてきた「日牟禮八幡宮」。古木が生い茂る境内には、どっしりとした拝殿や本殿が静かにたたずんでいる。

（注）米国生まれ。明治後期に来日し、近江八幡を拠点に活動。数多くの西洋建築を設計したほか、近江兄弟社、ヴォーリズ記念病院などを創立した。

に、古い民家の再利用を目指す「町家バンク」がある。住人がいない、実質空き家状態の古い町家は約五〇軒。それを登録してもらい、建物の保存のためにも、他県をふくめて広く借りる人を募るというシステムだ。

事務局を預かる田口真太郎氏によれば、「近隣景観形成協定地区」に指定されると自治体や国から多少なりとも補助が受けられるものの、瓦ひとつにしても受注生産となるだけに、その維持は大変なのだという。加えて不動産は権利問題が複雑なケースもあり、バンクを運営していく上での支障や課題は少なくない。町家の住民が、次第に高齢化してきているのも否めない。

「町家バンク」の要を担う田口真太郎氏。町家暮らしに憧れる人は全国でも少なくないが、新しい住人が近江八幡の伝統や文化にほれ込むことこそが大切だと話す。

とはいえ、これまで六軒の契約が成立し、うち四軒はカフェやベーカリーといった洒落（しゃれ）た店舗に。若い世代がまちに新風を吹き込んだ。さらには町家を巡るイベントやワークショップの影響もともない、地元の人たちのなかで旧市街や町家の認知が高まったと、田口氏は手応えを感じている。

地域の絆を再び取り戻すために

そんな田口氏は、実は茨城県の新興住宅地で生まれ育った。滋賀県の大学で都市計画を学んだことから近江八幡と縁が生まれ、卒業後に移り住んだ。町家暮らしも体験。メンテナンスの大変さを実感したと同時に、一度心が通じ合えば、家や庭の手入れに近所の人々が尽力してくれると、身をもって知ったという。

「清掃活動やお祭りまで、地元の人にとっては参加するのが当たり前なんですよね。でも僕らの世代では、言われなければわからない人もいる。その橋渡しにならなければなりません。ことに町家の保存とお祭りというのは、密接につながるものだと感じています」

「まっせ」の取締役のひとりであり、近江八幡商工会議所会頭の秋村田津夫（たつお）氏もまた、祭りの重要性を訴える。

近江八幡市には江戸時代から続く「左義長（さぎちょう）まつり」、応神天皇の日牟禮八幡宮への参拝に由来するともいわれる「八幡まつり」という、いずれも国の無形民俗文化財に選択された火祭りが継がれてきたが、若い世代の流出により、その文化が廃れつつある地域も見られる。

「祭りがあると集落がかたまる。気持ちをひとつにしてくれるんです。そのためにも保存会を立ち上げたいんです」

三月の「左義長まつり」（左）、四月の「八幡まつり」（上）と、春は近江八幡が賑わう季節。まつりそのものだけではなく、松明や山車を作る作業を介して住民の心がつながる。

実は旧近江八幡市と旧安土町、双方の地域で共通する祭りのかけ声が、「まわせ」という意味の「まっせ」なのだと、秋村さんは話す。「左義長まつりのルーツは織田信長時代の安土にあります。その山車（だし）を引き回すときのかけ声が、『まっせ』なんです」

祭りは集落のみならず、二つの地域の心をつなげる大切なキーワードになりそうだ。

また、商工会議所では伝統野菜「北之庄菜（きたのしょうな）」の再生プロジェクトにも取り組んでいる。江戸時代末期から昭和三十年代にかけて、農家が漬物用に栽培していた野菜

「若手が活動しやすい環境を整えるのが自分の役目」と語る近江八幡商工会議所の秋村田津夫会頭。生物のもつ優れた機能を工学に応用するバイオミメティクスを近江八幡で育てる活動にも取り組んでいる。

は、食生活の変化にともない、いったん姿を消したが、偶然に種が発見されて復活。給食での利用や、加工品として商品化され、その存在価値が見直されつつある。

また「たねや」では、今秋、豊かな自然が残る郊外に「ラ・コリーナ近江八幡」という新しい施設をオープンさせる予定だ。菓子の販売のみならず、山野草の農園や菜園なども設けられ、子どもたちの農業体験も行われる計画。

近江八幡の個性や魅力を未来に伝えるための、いわば種まきが少しずつ行われている。そんなことを思いながら、ボランティアガイドを務めて五年目になるという平松清廣氏とともに、旧市街をあらためてゆっくりと歩いてみる。

町家には表札がかかり、軒先には手入れがなされた植木鉢が並ぶ。テーマパーク的に創られたものではなく、住民たちがここで生活しつつ、昔ながらの景色を今も紡いでいるのだ。

ユーモアを交えて語る平松氏の案内は巧みながら、もともとはふつうの会社員だったという。

「観光ボランティアガイド協会主催の『近江八幡ふるさと観光塾』がきっかけです。自分が住んでいる近くに、こんなに素晴らしい景色が残っていると知って感動した。自分でもそれを広められたらいいなと」

絶滅したと思われていた北之庄菜は、10年ほど前に地元農家のマッチ箱から種が発見され、再び栽培が始まった。

現在、五四名のボランティアガイドが、観光客の案内役を務めるが、その多くは近江八幡に魅せられた移住者なのだそうだ。

移住者の動向で注目したいのは、駅近くの利便性の高い住宅地ではなく、自然が残る郊外が選ばれることだろう。京都まで三〇分、大阪は一時間というロケーションながら美しい景色が広がり、場所によっては家の窓から琵琶湖が望める。

「景観」、近江八幡観光物産協会の森嶋氏の言葉を借りれば「いいもの」を守る選択をした近江八幡は、図らずも人を呼び寄せている。

森嶋氏はまた、こんな話もしてくれた。

「このまちの商家には、共通する姿勢がありましてね、ひとつは商売をしたら店をつぶしてはならぬというもの。もうひとつが、皆さんのおかげで商売させてもらっているということ」

道で知人と会えば、「こんにちは、どうですか。気張ってはりますか」と挨拶する。それに対し、「おかげさんで」と返すのが近江八幡の習わしだ。

「この地の考え方と文化が守られていれば、永久に安泰だと思います。社会にどんな変化が起きても耐えていける」

秀次が城を築いた八幡山を仰ぎ見ながら、冨士谷市長の言葉を思い出した。

商いの才覚や背後にある歴史は、一朝一夕で積み上げられるものではない。だからこそ「三方よし」の気配りをはじめ、この地に根づいた精神が町並みに宿り、輝きを放つ。今だからこそ、それは大切なことのように思えるのだ。

琵琶湖東南岸にある最大の内湖「西の湖」もまた、かつての水郷の景色を残す近江八幡の宝のひとつ。2008年には琵琶湖の「ラムサール条約湿地登録エリア」に追加された。

対談 守破創

日本のゴルフ界を支え続け、今年プロ生活50周年を迎えるプロゴルファーの青木功氏。対する岩田規久男副総裁は、アカデミックの世界で存在感を放ってきた経済学者。一見「異色の対談」だが、世界を意識し続けてきた同年齢の二人だけに、まるで旧知の友のように話は盛りあがった。

完成と思えば成長なし

日本銀行副総裁

岩田規久男

Kikuo Iwata

1942年東京都生まれ。1966年東京大学経済学部卒業、1973年東京大学大学院経済学研究科博士課程修了、同年上智大学経済学部専任講師、1976年上智大学経済学部助教授、1983年同大学教授、1998年学習院大学経済学部教授、2013年3月日本銀行副総裁就任。

プロゴルファー

青木 功

Isao Aoki

1942年千葉県生まれ。我孫子市立我孫子中学校卒業後、東京都民ゴルフ場などでキャディーとして勤務。1964年プロ入会。1971年関東プロゴルフ選手権で初優勝。1976年初の賞金王、翌年の2位を挟んで、1981年まで賞金王を連続で獲得（通算5回）。歴代11人目となる日米欧豪の4大ツアーのすべてで優勝。1980年全米オープンで記録した2位の成績は、今も日本男子によるメジャー大会での最高位。2004年日本人男性初の世界ゴルフ殿堂入り。2008年紫綬褒章受章。2013年日本プロゴルフ殿堂入り。生涯通算では85勝（2014年1月現在）。

師匠の技を「目で盗む」

岩田　二人とも昭和十七年（一九四二）生まれの同い年ですから、肩の力を抜いてやりましょう。

青木　そのほうが僕も安心してしゃべれます。かしこまってやるのは苦手なので……。

岩田　日本銀行というと、かしこまったイメージになりがちですが、青木さんは日銀にどんなイメージをお持ちですか。

青木　初めて日銀に来ましたが、何か重厚な雰囲気を感じます。ここが金融の中心で、僕の持っているお札がここから来たのかと。

岩田　そうおっしゃる青木さんは、長年ゴルフ界の中心です。賞金王五回、日本、世界でゴルフ殿堂入りもされています。最近では六度目のエージシュート（注1）を達成されています。

青木　ゴルフは生涯現役。実は僕は、今年の六月一日でプロ生活五〇年になります。

岩田　では、プロ半世紀を振り返ってみて。

青木　ゴルフとの出会いは、中学生のときにキャディーをやったことがきっかけです。就職先もゴ

写真 谷山 實

ルフ場でした。お世話になっていた林由郎さん（注2）が、六一年の日本プロゴルフ選手権に勝って三〇万円を獲得しました。当時だと総ヒノキの家が建つ金額です。それで、よし、オレもやってやろうとプロを目指しました。

岩田　ゴルフの技術は林プロに習ったのでしょうか。

青木　習ったというか、師匠の技術を「目で盗め」ですよ。そもそも日中はキャディーの仕事をやっていますから、教えてもらう時間もなかったです。

　ゴルフにも基本はあります。でも、それだけではダメ。大事なのは応用力。人によって体つきが違いますから、グリップやスイングも一人ずつ違ってきます。試行錯誤で自分のスイングを見つけていかないと。

岩田　そうですか。私が取り組んできた経済学では、教科書や先生について基礎理論を習得するところからはじまります。経済学のような社会科学の世界は、共通の土俵をしっかり持たないと先に進まない面が大きいので、ゴルフのような競技の世界とは随分異なりますね。ところで、「目で盗む」とおっしゃいましたが、一瞬の動作をどうやって盗むんですか。

青木　動体視力が良かったですから、とにかく集中して見続ける。それを頭の中で再現するんです。日中に師匠のスイングを盗み、早朝などの空いた時間に練習をしました。一日も休まず、ゴルフ漬けの生活を四、五年やって力をつけました。教わったものよりも、自分で覚えたほうが絶対に強いです。

岩田　私は長年教壇に立ち多くの学生を育ててきましたので、教師の役割への信念として「教え導く人がいてこそ学ぶ人も育つ」という思いが強くあります。

　しかし、どういった分野であれ、青木さんのように自分の技術でもって勝負するレベルまで高まっていくと、やはり「個」の主体性がより強く意識されてきますね。

　とはいえ、誰かコーチングする人がいないと、遠回りをしたり、壁にぶち当たったりしがちな気もしますが。

青木　確かに、自分で覚えたと言っても、自分ひとりで上手くなったわけじゃないんです。プロになって数年は、軸足がぶれてショットが曲がる癖がありました。飛ばそうとして手首をひねるとますます曲がる。そこで中学の同級生の鷹巣南雄（たかすなみお）プロ（注3）にスイング改造を手伝ってもらいました。クラブに手を縛りつけて、一カ月以上、毎日千発は打ち込みました。これはゴルフ人生の転機となりました。鷹巣プロがいなければ今の青木功はいないですね。

岩田　青木さんは人との出会いに恵まれていますね。ほかにもたくさんの方に支援されています。これは青木さんのオープンなお人柄のなせる業のような気もしますが、いかがですか。

青木　僕はいつも思ったままに行動してるだけなんですが、ゴルフに対して真面目なのでそれが良かったのかも知れません。いつかやろうじゃなくて、やるときは今すぐやる、とことんやります。

　結果が出るようになって『あの人たちのおかげだな』とつくづく思うようになりました。一人の世界じゃないということですね。

直感と「アドレナリン」で勝ち取った全米ツアー初優勝

岩田　ところで、プロでのご活躍を伺いたいのですが、日米欧豪の世界四大ツアーすべてで優勝され、通算八五勝と偉大な記録を残されています。その中でどれが一番記憶に残っていらっしゃいますか。

青木　それぞれ思い出がありますが、一番は八三年のハワイアンオープンですね。日本人初の全米ツアー初優勝です。

　あのときはトップタイでパー5の最終ホールまでいったんですが、一打目も二打目もミスしてラフにそれた。一方、トップで並んでいた相手は四打で上がった。そこで僕は三打目を直接入れて勝ちました。

岩田　追いつくのが精いっぱいの状況で逆転勝ちとは、まさしくミラクルショットですね。

青木　ピンまで残り一二八ヤード。イメージしていたのは、まずグリーンに乗せて、ワンパットで沈めて何とかプレーオフに持ち込むというシナリオです。パットには自信がありましたから、グリーンに乗せられるかがポイントでした。

　勝利を決めたショットでは、キャディーの助言を聞かず、迷わず飛距離の出ないピッチングウエッジを選びました。この場面は通常なら九番アイアンです。手前にバンカーがありましたから。ですがあ

（注1）ゴルフの一ラウンド（一八ホール、パー七二）を自分の年齢以下の打数でホールアウトすること。

（注2）戦後復興期の日本ゴルフ界を支えたプロゴルファー。引退後は解説者、指導者として活躍。文部大臣スポーツ功労者顕彰など受賞。

（注3）プロゴルファー。通算六勝。二〇〇八年から杉並学院ゴルフ部監督。

の瞬間「九番だと行き過ぎる」と思って、普通は届かないピッチングウエッジを選んだんです。三打目、僕がクラブを抜いたら、キャディーは「オー、ノー」と言いましたよ。

岩田　ギリギリの場面で、普通じゃない選択をした。どうしてそう判断したんですか。

青木　プロとしての勘です。アドレナリンが出ていました。昔でいったら「火事場の馬鹿力」です。国内では何回か勝っていましたから、勝つときのアドレナリンの出方を知っていました。ですから、九番ではオーバーすると分かったんです。

岩田　大事なジャッジメントをするときのプロの頭の働きは、分析とか計算よりも、その瞬間の直感、身体の感覚のようなもので分かってしまうわけですね。確かに誰かに教えられるものじゃない。才能や経験のほかに、練習の賜物ということでしょうか。

青木　そうですね。オレはこれだけやったから負けるわけない、と。パッティングに自信があったと言いましたが、なぜかといえば、それだけ練習したという自負があるからです。キャディーをしていた研修時代は、誘蛾灯（ゆうがとう）を頼りに夜遅くまでパッティングを練習しました。夜警の方に「寝られないから早く帰れ」と言われたりしたものです。結局、負けず嫌いなんですよ。だから練習するんです。

　それと気持ちの強さも大事。勝つにつれて自信がついて、欲が出てきました。「平常心」とよく言いますが、平常心では物事は成し遂げられませんよ。「絶対に勝つぞ」という気持ちがなければ。

岩田　チャレンジすると失敗もあるので「失敗するリスク」ばかり意識しがちです。しかし、実は「何もしないリスク」もあるんですよね。両方のリスクを公平かつ冷静に考え抜いたうえで、必要なチャレンジは果断に行う。何事にもこうした姿勢が必要だと思います。

青木　僕は常にプラス思考ですから、失敗しても気にしません。ゴルフの神様が「おまえ下手だからもう一回やれ」と言っているんだなと、そんなふうに思いますね。だから、重要な場面でも思い切り勝負できるのかもしれません。

　それと面白いもので、ミスをすると、どうしてミスしたんだろうと考えて練習するんです。ミスするからうまくなるんです。

岩田　経済学では「アニマル・スピリット」と言って、リスクを取ってチャレンジする企業家精神こそがイノベーションを生み出して経済を発展させる、という考えがあります。青木さんには企業家のアニマル・スピリットに通じるものを感じます。

海外では言葉よりも気持ちでコミュニケーション

岩田　最近は世界に出る日本選手も多くなりました。今でこそ英語を話せる日本人選手も増えましたが、先駆者としてやっておられた青木さんは言葉の壁はなかったのですか。

青木　ないですね。こっちは日本語、向こうは英語で話しても通じますよ。要は、英語をしゃべれないんだけどしゃべりたい、だから一生懸命片言でもしゃべっているんだという気持ちを相手に分かってもらう。ボディランゲージもあるし、英語でも日本語でもどんどん話しかける。そうすれば相手と友達になれます。ゴルフの試合もやりやすいと思います。

岩田　学者の世界では、いくらいいことを考えていても、相手に伝わらなければ何も考えていないのと同じです。外国人に考えを正確に伝えることには特に意を用います。

　スポーツの世界でも言葉の不自由さが多少は影響しそうですが、青木さんのように英語をストレスとして感じないということはとても大切なことですね。

青木　ゴルフのスコアとは関係ありませんから。それに「火曜日にうちでバーベキューやるから来るかい？」こんな誘いに乗れたらすぐに友達ができます。英語ができなくても、一緒にビールを飲みながら適当に「ふんふん」なんてやっておいて、「じゃあな」と帰ってきたっていいんですから。友達になればリラックスできるし、知らないうちに言葉も覚えますよ。

　若い人たちに言っておきたいのは、海外にいっても、日本人同士の集団だと、そういう誘いもないですから日本人だけで固まってたらダメです。

「この道しかない」と信じることからはじまる

岩田　野球の川上さん（注4）は、昔「ボールが止まって見える」と言っていました。ゴルフをやっていて、そういう心境になりますか。

青木　ゴルフが全部分かったとは思いませんが、自分でも「よしっ」というときがありますよ。

（注4）川上哲治。プロ野球選手・監督、野球解説者。現役時代から「打撃の神様」と言われ、戦時中から戦後におけるプロ野球界の大スターとして活躍（一九二〇～二〇一三）。

大事なことは理屈じゃなくて、体で感じるかどうかです。試合をやるコースでも、レイアウトを一回覚えたら、朝ぱっと起きたときに「きょうは西風だ。何番ホール、何は難しい」と、自分が鳥になったように、上から全部見えています。

岩田　そういうのはやっているうちに会得するものなんですか。努力してもそこまでの能力を得られるものじゃないと思いますが。

青木　最後は動物的な勘ですよ。努力してもなれない人もいれば、努力しなくてもなれる人もいます。ただし、努力しないでなった人は頂点はなかなか難しいでしょう。努力した人は、どうやって自分がここまで来たか分かってますから、一回勝てば頂点に行くのが早いですよ。

岩田　青木さんは後進の指導にも力を入れていると聞きます。若者世代に対して伝えておきたいことはありますか。

青木　まずは「この道しかない」と信じること。僕にとってはゴルフ。ゴルフの神様が「おまえにはこれしかないよ」と言ってくれた。ゴルフは天職なんですよ。

それと、どのスポーツでも自分が一番になりたいという気持ちを常に持っていなければダメですね。簡単にあきらめない。僕は八五勝していますが、二位が二〇〇回ぐらい。悔しさは喜びの三倍ぐらいありますよ。

岩田　ナンバーワンになるためには、ナンバーツーが何回もあるということですね。

青木　ナンバーツーを何回か経験したことによって、もう一つ上のナンバーワンが狙えますから。人生苦もありゃ楽もある。苦労しないで一人前になれるということはあり得ないですよ。

その苦労を人に言ったからといって人は助けてくれません。認めてはくれるかもしれないけれども、助けてはくれません。でも、なせばなるし、ならなければ「もう一回努力すればいいや」ということです。

「体・技・心」で生涯現役に挑む

岩田　五〇年のプロ生活では、スランプの時期もあったんでしょうか。

青木　勝てないという意味でなら、六五歳で一回勝っているけれども、六〇歳ぐらいからずっとそうなのかも知れません。でも、常に前を向いてますから、あまりそういう意識を持ったことはないですね。

岩田　幸せなゴルフ人生ですね。ゴルフはメンタルなスポーツだと言いますが、余り悩みはなかったみたいですね。

青木　好きなゴルフをやっていたら悩みはないし、そもそも悩んでいる暇がないですよ。

メンタルが大事とよくいいますが、僕は体がすべての基本だと思います。体が元気じゃないと、技も身に付かないし、やりたいこともやれない。やりたいことができてはじめて心も充実すると思います。

岩田　青木さんは「心・技・体」じゃなくて、「体・技・心」。「肉体を鍛えることで心も鍛えられる」ということですね。そのために何か心がけていることはありますか。

青木　怪我が一番怖いので、ここ二、三年すごく用心深くなりました。若いときだったら一カ月で治る怪我でも、今は三カ月たっても治りません。

日頃から体調維持のために肩甲骨を動かしたり、腹筋をしたり、朝汗かくほど散歩したり、いろいろやっていますよ。僕はゴルフと一緒に生活していますから。

岩田　プロ生活で何かやり残したこと、これはやり遂げたいというのはありますか。

青木　ありますよ。もっとうまくなって、もっと勝ちたいです。僕の場合には進むべき道は一つしかないんですから。ゴルフはまだまだ分かりません。

岩田　「完成した」と思ってはいけないということですね。

青木　僕の気持ちの中では、「完成と思えば成長なし」。これ以上先へ進まないということですから、成長しないでしょう。

だから、「おまえ幾つまでゴルフやるんだ?」と聞かれたら、答えは「決めてない」。幾つになっても挑戦心を忘れたくないです。

岩田　我々世代もまだまだ頑張っていきたいですね。今日はどうもありがとうございました。

日本銀行の支店建物 7

日本銀行旧岡山支店

中村茂樹 日本銀行文書局技師

瀬戸内海の温暖な気候にめぐまれている岡山は、古代の吉備国の時代より、多様な文化を育んできました。第七回は、岡山市に立地する旧岡山支店の建物を紹介します。

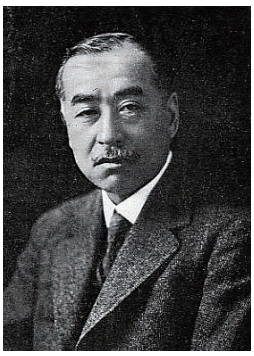


写真1　長野宇平治　明治26年（1893）帝国大学工科大学（現在の東京大学工学部）造家（建築）学科を卒業。わが国屈指の古典主義建築家として知られ、日本銀行本支店をはじめとする数多くの銀行建築を手がけた。（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

岡山支店の開設

江戸期に岡山藩池田家の城下町として栄えた岡山市は、明治期以降も中四国地方の交通の要衝の地として発展を続けます。

しかし、金融面では、中小銀行が乱立し、手形交換所や銀行集会所も設置されていない状況にあるなど、必ずしも十分ではありませんでした。当地の管轄が遠方の日銀大阪支店であったこともあり、大正期より大原孫三郎（注1）ら銀行関係者のほか地元各方面から、岡山支店誘致の運動が進められていました。

岡山支店開設にあたっては、すでに山陽地方に広島支店が開設（明治三十八年〈一九〇五〉）されていたため新たな支店設置が容易に進まないなか、大正八年（一九一九）三月に、岡山県出身の木村清四郎（注2）が、第四代日本銀行副総裁となります。

木村副総裁は、支店開設の実現に大いに尽力することになります。

岡山および善通寺（香川）に置かれた陸軍師団や、鉄道・専売局（注3）関係の国庫金取り扱いに便宜を図るため、大蔵省（現財務省）を説得し、大正九年（一九二〇）に岡山支店の設置が決定しました。

開設時の岡山支店は管轄区域の経済規模や交通の便を勘案し、岡山県のほか香川県も管轄することになります（現在は岡山県のみ）。

日本銀行は支店の用地選定にあたり、日本三名園のひとつである後楽園（注4）にほど近いかつての岡山城二の丸内、家老屋敷などがあった土地に着目しました。この土地には明治期に岡山医学専門学校と岡山県病院が建てられていましたが、どちらも大正十年（一九二一）に岡山市鹿田町（現在の岡山大学医学部の所在地）に移転したため、その土地を購入して、支店建築計画が始まります。（図1）

岡山支店の建築

岡山支店の設計は、長野宇平治（写真1）に委ねられました。

写真上（現在の外観）／下（新築時の外観）（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

（注1）大原孫三郎　岡山県倉敷市に生まれ、倉敷紡績（クラボウ）、倉敷絹織（現在のクラレ）、中国合同銀行（現中国銀行）、中国水力電気会社（現中国電力）の社長を務め、大原財閥を築き上げる。

（注2）木村清四郎　第四代日本銀行副総裁（大正八年〈一九一九〉三月～大正十五年〈一九二六〉十一月）。岡山県生まれ。中外商業新報（現日本経済新聞）を経て日本銀行入行。貴族院議員。

（注3）専売局　大蔵大臣の管理下で、タバコ・塩・アルコール等の製造・販売などに関する事務を担当した官庁。

（注4）後楽園　江戸時代初期に岡山藩主・池田綱政によって造営された元禄文化を代表する庭園。日本三名園のひとつ。

図１　歴代岡山支店の所在地

図２　旧岡山支店の平面図（新築時）

長野は、明治三十年（一八九七）に日本銀行技師となって以降、同建築顧問の辰野金吾（注5）とともに大阪、京都、小樽など明治期に建てられた日本銀行の支店建築のすべてに関わり、一連の支店建築が終了した大正元年（一九一二）に日本銀行技師長を辞し、翌大正二年（一九一三）に自らの長野建築事務所を開設しました。

独立後、長野は、辰野の教えを受け継いだ代表的な後継者として、独自の古典様式による多くの民間銀行の建物を設計する傍ら、日本建築士会会長として建築家の職能確立に尽力します。長野建築事務所は、建築部門を大幅に縮小していた日本銀行の建築関係者の多くを引き入れ、日本銀行の外郭設計組織の機能も果たしていきます。

また、この工事の施工は、辰野の教え子で日本銀行本店建物の建築にも関わった山本鑑之進（注6）が設立した工務店をそのまま引き継いだ藤木工務店（注7）が、長野の強い信頼と期待を受けて創業第一作として請け負いました。

岡山支店開設が決定する前年に没した辰野の遺志を継いで、辰野に深く関わる長野と山本の二人により建築された建物ともいえます。

大正十年（一九二一）一月に着工した工事は、翌十一年（一九二二）三月に完成しました。

最後のレンガ造り建築

新築時の岡山支店は本館、金庫および機械室・宿直室等の付属家（ふぞくや）で構成され、本館と金庫は金庫前廊下で接続されています。（図２）

本館は、鉄筋コンクリートの柱と床にレンガ積みの壁を併用する複合構造の二階建てで、レンガ積み壁の外側に花崗石（かこうせき）を貼った重厚な石造り風古典様式の建物です。建物正面の三角ペディメント（注8）や、外壁の腰部分に一列に彫りこまれた波状模様（写真２）、営業場床の大理石模様張り、および同一階天井の漆喰（しっくい）装飾（写真３）など古代ギリシャ古典様式の装飾にも特徴があります。また、コンクリート下地アスファルト葺（ぶ）きの屋根は鉄骨トラス構造（注9）の小屋組みで支えられ、柱のない二層吹き抜けの広い営業場や（写真４）、正面に並ぶ巨大な四本のコリント式オーダー（注10）の独立円柱が大きな特

写真２

写真３

（注5）辰野金吾
明治十二年（一八七九）工部大学校（現在の東京大学工学部）造家（建築）学科を第一回生として卒業。近代日本建築界の先覚者。日本銀行建築顧問。日本銀行本店本館のほか、東京駅など明治大正期の日本を代表する建築物を数多く手掛けた。

（注6）山本鑑之進
工手学校（現工学院大学）を第一回生として卒業。辰野金吾の下で日本銀行本店、東京駅、日本生命旧館等の現場監督として活躍し、のちに住友本店臨時建築部を経て、工務店を創設。

（注7）藤木工務店
大阪市に本店を置く建設会社。大阪の山本鑑之進工務店に勤務していた藤木正一が、山本鑑之進の事業を継承して、大正九年（一九二〇）創業。主な施工例／大原美術館、旧第一合同銀行本店（中国銀行旧本店）ほか。

（注8）ペディメント
西洋建築の切り妻屋根における妻側屋根下部と水平材に囲まれた三角形の部分。

（注9）トラス構造
小さな三角形を多数組み合わせた鉄骨構造。

左／写真５　正面玄関前に
並ぶ壮大なコリント式列柱

下／写真６　柱頭を飾るア
カンサスの葉模様

写真４　旧岡山支店の営業場風景
（日本銀行金融研究所アーカイブ所蔵）

徴となっています。（写真5・6）

この柱は、日本の古典様式建築の中で一番均整の取れている柱ともいわれ、古典様式建築家として高く評価される長野の代表作のひとつといわれています。

岡山支店完成の翌年に起きた関東大震災以降、耐震性に劣るレンガ造りは用いられなくなり、同支店は日本銀行最後のレンガ造り建築となりました。

金庫館の増築

昭和二十年（一九四五）六月、岡山市内全戸数の八割を焼失する空襲により県庁・市役所を始めほとんどの行政・金融機関が全焼するなか、岡山支店は木造の付属家等を焼失したのみで本館・金庫館等は被災を免れました。（写真7）

空襲直前に、店舗の裏側にあった支店長宅が空襲時の延焼防止策として取り壊されていたため、店舗の消火活動が迅速に運んだことが幸いしました。

被災直後、応急的に宿直室等の復旧工事を施したうえで、翌二十一年（一九四六）から二十六年（一九五一）にかけて、店舗隣接の支店長宅跡地を取り込んで逐次付属家の増改築を施しました。（図3）

一方、戦後の業務拡大により開設時の金庫館のみでは狭隘（きょうあい）となり、金庫を順次増築することになります。

まず、戦後の銀行券保管量の著しい増加に伴い、昭和二十三年（一九四八）七月に鉄筋コンクリート造りの倉庫を

写真７　空襲焼け跡に立つタール塗りの旧岡山支店

図４　旧岡山支店の平面図
（昭和 42 年金庫館増築時）

図３　旧岡山支店の平面図
（昭和 26 年付属家増築時）

（注10）コリント式オーダー
古代ギリシャ建築におけるドーリア式、イオニア式と並ぶ三つの主要建築様式のひとつ。溝が彫られた細身の柱身と、アカンサスの葉（ちょう）がかたどられた装飾的な柱頭を特徴とする。

（注11）水島工業地帯
岡山県倉敷市に所在する工業地帯。第二次大戦中の三菱重工業の航空機製作工場を皮切りに戦後の重化学工業化により発展し、全国的にも有数の巨大工業地帯のひとつ。

（注12）国の有形登録文化財
平成八年（一九九六）の文化財保護法改正により、従来の文化財指定制度（重要文化財）に加えて創設された文化財登録制度。急激に消滅しつつある近代の建造物の保護にあたり、より緩やかな規制のもとで幅広く保護の網をかけることを目的とする。

写真８　増築後の金庫館

代用金庫に改造して対応しました。

続いて、開設時の金庫館の老朽化対応のため、昭和三十八年（一九六三）九月に同金庫の改修に併せ鉄筋コンクリート造り平屋建ての金庫を増築しました。

その後、水島工業地帯（注11）の発展により岡山支店管轄の経済規模が急速に伸張し、銀行券保管量の更なる増加に対応するため、昭和四十二年（一九六七）十一月に鉄筋コンクリート造り二階建て地下一階の金庫館（写真8）を増築しました。また、これに併せ、開設時の金庫は取り壊され、その跡地に荷捌（にさばき）所を新築し、付属家の一部を改修しました。（図4）

多目的ホールとしての保存再生

更に、昭和五十年以降の業務機械化の進展に伴い、既存営業所建物の狭隘化が著しくなり業務に支障が出てきたため、適地を求めて新築移転することになりました。

新築用地として、既存営業所から北に二百メートル離れた旧岡山赤十字病院跡地を購入し、昭和六十一年（一九八六）二月に工事に着手、昭和六十二年（一九八七）九月に新営業所が完成し、同十月に移転しました。（写真9）

旧営業所の土地建物は銀行としての役割を終え、平成元年（一九八九）に岡山県に売却されました。

当初、県による県立図書館の移転候補地として計画が進められていましたが、旧岡山支店建物の歴史的建造物としての保存手法として県民から疑問の声が上がり、平成十年（一九九八）に再利用計画は白紙に戻ります。

その後、地元住民を含む市民組織により活用方法を検討することになり、翌十一年（一九九九）に「旧日銀岡山支店を活かす会」が設立され、同活かす会を中心に検討が進められ、平成十五年（二〇〇三）、県は「生音（なまおと）を活かした音楽を中心とする多目的ホール」として整備することを決定します。

歴史的建築物の本館建物に対する補強と再利用のための改修という困難な工事は平成十七年（二〇〇五）に完了し、同年に本館建物が国の有形登録文化財（注12）に登録されました。さらに平成二十三年（二〇一一）には、金庫館のリノベーション工事も完成しました。

歴史的建造物の銀行建築を、耐震補強を含む質の高い多目的ホールへと改修工事を施したことに対し、平成十八年度のBELCA（ベルカ）賞（注13）、さらに市民組織と地方自治体の連携により保存再生利用を果たした業績に対し、平成二十四年（二〇一二）に日本建築学会賞（注14）が授与されています。

現在、活かす会の後継として設立されたBOA岡山（注15）の管理運営により、市民からルネスホール（注16）の愛称で親しまれながら、幅広い多目的ホールとして活用されています。（写真10・11）

これからも、旧岡山支店建物が、岡山の文化芸術の発信地として保存・活用されることを期待します。

写真９　現在の岡山支店

写真10　公文庫カフェ

写真11　多目的ホール（旧営業場）

（注13）BELCA賞
適切な維持保全または優れた改修を実施した既存の建築物のうち、特に優秀なものを表彰し、わが国における良好な建築ストックの形成に寄与することを目的とする表彰制度。ロングライフとベストリフォームの二部門からなる。

（注14）日本建築学会賞
日本建築学会が設けている国内で最も権威のある建築の賞。論文、作品、技術、業績の四部門からなる。

（注15）BOA岡山
NPO法人「バンク オブ アーツ岡山」の略称。「旧日銀岡山支店を活かす会」の旧メンバー有志により設立された「おかやま旧日銀ホール」の指定管理者（岡山県より平成十六年（二〇〇四）十月指定）。

（注16）ルネスホール
「おかやま旧日銀ホール」の愛称。飲食機能を持つ多目的ホールとして、岡山の芸術文化の育成・発信を目的とする用途に使用。

日本銀行大阪支店の仕事

「西の母店」として全国を支える

日本銀行には、東京の本店のほか、全国に三二の支店があり、それぞれの地域において、経済活動に必要なお金の循環の「心臓部」として役割を果たしています。

こうした中で、規模・役割の両面から重要な拠点となっているのが、西日本の母店機能を持つ大阪支店です。日本銀行開業のわずか二カ月後、明治十五年（一八八二）十二月に開設された大阪支店は、大阪府、和歌山県、奈良県を担当区域とし、全支店中最大の規模となっています。また、本店が災害等で本来の機能を十分果たせなくなった際に業務を代替する拠点となっており、日ごろから業務継続のための訓練も怠りません。今回は大阪支店の日ごろの業務と非常時への備えについて取材しました。

歴史と威厳を漂わせる建物の奥では、暮らしに密着した仕事が行われている

水都大阪の水運の要を担った堂島川と土佐堀川に挟まれた中之島。古くは各藩蔵屋敷が立ち並び、現在も大阪を代表するビジネス街です。その中之島の、大阪のメインストリート・御堂筋に面した一角に日本銀行大阪支店はあり、大阪市役所本庁舎と御堂筋を挟んで向き合っています。

大阪のランドマークの一つとなっている大阪支店旧館は、本店と同じくわが国近代建築の第一人者・辰野金吾が設計したネオバロック様式の洋風建築です。緑青が美しいドーム屋根など重厚な外観は、支店が築いてきた歴史を感じさせます。市民にも親しまれ、年間五千人の見学者が訪れています。

旧館の奥にある新館では、関西経済を支える日銀の業務が行われています。お札の発行、金融機関や国のお金の受け払いなど、いずれも地域の暮らしの基盤となる仕事です。大阪支店の職員、約三〇〇人が、営業課、業務課、発券課、文書課の四課に分かれて、これらの仕事を担っています。順を追って、これらの仕事を紹介しましょう。

お札の品質を守る——西日本の現金供給の一大拠点

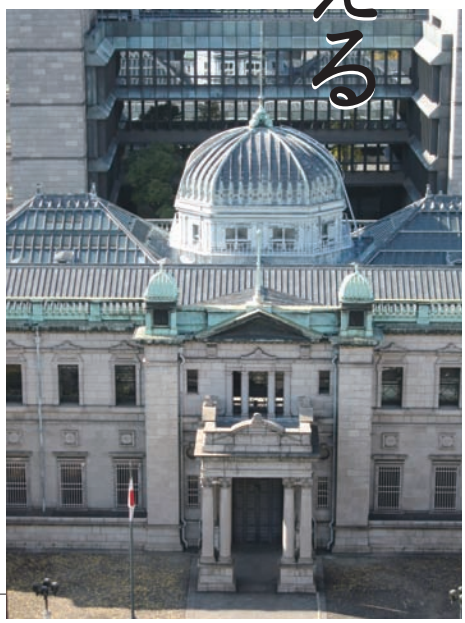
多くの人は、日本銀行と聞くとお札（正式名称は「日本銀行券」）を連想することでしょう。

私たちの手元にあるお札は、国立印刷局で印刷され、日本銀行が引き取り、発行したものです。お札の大半は民間金融機関に払い出され、そこから企業や個人に流通し、日々の取引に使われています。大阪支店発券課では、滋賀県にある国立印刷局彦根工場から新しいお札を引き取り、これを支店から発行するほか、大阪以西の各支店に新札を供給しています。大阪支店自身が発行するお札は、全国の二割弱にのぼるほか、西日本におけるお札の供給について重要な役割を担っています。

発券課企画役の小玉建心さんは、話します。

「きれいなお札を世の中のすみずみまで届けることは、偽造防止という点と、気持ちよくお金を使っていただくという点で非常に重要だと考えています。ひいてはそれがお金の価値や日本銀行への信頼につながります」

お札の平均寿命は、五千円券と千円券で一年程度、一万円券でも四～五年です。企業や個人の取引で利用されたお札は、金融機関を



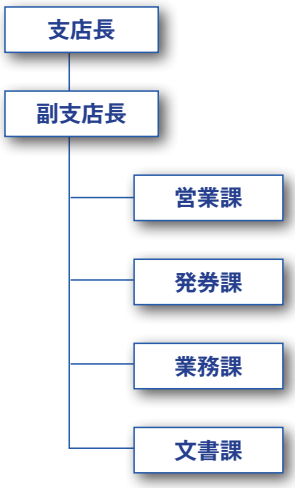
大阪支店の外観

通じて日銀本支店に持ち込まれます。日銀では、戻ってきたお札を再び世の中に出しても良いように、一枚一枚、偽札が混ざっていないか、傷み具合はどうかチェックしています。この仕事を「鑑査」と呼びますが、日銀には毎日大量のお札が戻ってくるので、この仕事には特注の機械（鑑査機）を用いています。大量のお札を迅速に処理することが求められる一方で、厳格なチェックをきちっと行う必要があるため、鑑査機には高度なセンサー技術などが数多く用いられています。

ちなみに、大阪支店における鑑査処理量は一日に九〇〇万枚。年間では二〇億枚以上に達します。偽造が疑われるお札は鑑査機から排出され、最後は人間の目で一枚ずつ真偽を鑑定します。大阪支店管内でも毎年偽造券が発見されていますので気は抜けません。同課企画役の小戸善夫さんはこう話します。

「スキャナーやカラープリンター等の技術は日々進歩しています。我々は最後の砦ですから、偽札鑑定技術の研鑽を怠ることはできません」

■大阪支店の組織



一方、個人の方が持ち込んだ、傷んだり汚れたりして使えなくなったお札の引き換えも大切な業務です。同課企画役の福島博司さんはこう話します。

「不安な面持ちで、焼けて灰になったお札を持ってこられる方もいらっしゃいます。私たちは灰の中から、一枚でも多くのお札を見分けようと目を凝らして鑑定します。鑑定が終わって最後に新しいお札をお渡しすると、皆さんぱあっと笑顔になりますし、ほっとして泣き出す方もいらっしゃいます。私たちもうれしくなります」

近畿・四国の金融機関（四千店舗）で受入れた国のお金を集計処理

日銀が「政府の銀行」として行っている国のお金の受払いも、私たちの生活と深くかかわっています。お金の受入れの仕事を例にとると、私たちが国に支払う、税金や社会保険料、交通反則金などは、通常、金融機関が受入れますが、実は金融機関は日銀の代理人として受入れているのです。受入れたお金や証票は日銀に集められ、そこで国のお金として計上されます。

大阪支店では、業務課がこうした国のお金を計理する仕事をしています。大阪支店は管内だけでなく、近畿二府四県と四国等の金融機関（約四千店舗）が受入れたお金について取り纏めの仕事をしています。

税金等国のお金の計理処理では、OCR（光学式文字読み取り装置）と呼ばれる自動読み取り機を用い、金融機関から送られてきた納付書をデータ処理していますが、その物量は、年間約六百万件、全国の約二割を占めます。関係官庁は、そのデータを基に、納付の有無の確認などを行っています。

こうした国のお金は、金融機関で受入れた日の翌々営業日に国のお金として計理しています。年間で最も集中する日は、大阪支店では一日当たり二〇万件もの計理処理を行います。OCRの読み取りエラーが出たものは手入力で補正する必要があり、納付書に記載された文字が判読できないときなどは、一件一件金融機関に電話で確認しなければなりませんから大変な作業です。

業務課企画役補佐の竹野啓さんは話します。

「一円たりと間違えてはなりませんし、一日たりとも遅れてはなりません。正確迅速にデータを送ることで『政府の銀行』としての負託に応えられるのだと責任感を持って臨んでいます。地味で外からは見え難い業務かもしれませんが、身近なところに日銀の仕事があることを知ってもらえるとうれしいですね」

地域の金融経済の動向を把握し、分かりやすい情報発信に取り組む

日本銀行が行う金融政策は、全国各地の景気動向を点検したうえで決定されています。

大阪支店営業課では、首都圏に次ぐ規模の関西経済の調査を担当しています。

景気動向の分析には、統計などの経済指標や企業から提供されたデータを分析するアプローチと、面談などにより景況感を聞き取り（「ヒアリング」といいます）、得た情報を分析するアプローチがあります。支店では、どのように経済を把握しているのでしょうか。営業課で調査グループ長を務める宇野洋輔さんに聞きました。

「地域の経済指標やデータに制約がある中で、緻密なヒアリングを組み合わせて、経済動向を多角的に検証していきます。

例えば、当地は百貨店が多いという特徴があります。百貨店の販売額が増えた時、なぜ増えたのか、どんなものが売れているのか、どんな人が買っているのかといったことをデータやヒアリングを通じて調査し、景気を左右する消費者行動の変化を分析していきます」

ヒアリングは、支店長が企業のトップと面談したり、若手担当者が生産や販売の担当者の方とコンタクトをとったりと、いろいろな階層で行っています。

「景気に対する見方は人それぞれ。景気が回復している状況でも、悪いと思う人は必ずいます。様々な経済指標やヒアリング情報から、景気情勢の変化の兆しを察知し、管内全体の景気の先行きを予測することは容易ではありません。ですが、断片的なピースの一つ一つがきちっとはまり、クリアな分析結果が導かれる時、目の前の靄が一気に晴れていくような感覚になり、経済という生きものをリアルに感じる醍醐味があります」（宇野さん）

このほか営業課の総務・金融グループでは、管内の金融機関の預金や貸出の動き、さらには資金繰りや経営動向を日々モニタリングしています。日頃から金融機関と綿密なコンタクトをとることで、関西地区の金融の情勢を見極めています。

このように金融と経済の両面から分析を行った結果は、毎月の支店長記者会見で公表されるほか、四半期に一度本店で行われる支店長会議などで報告されます。

支店長をはじめとする支店幹部は、大学や経済団体などに赴いて講演も行っています。営業課では情報発信の強化に取り組んでおり、「外部講演は、年間一〇〇回を超す頻度で行っています」（宇野さん）。

また、最近はホームページを通じた情報発信にも力を入れています。ホームページは昨年十一月に、親しみやすいビジュアル、内容にリニューアルしました。大阪支店の歴史に触れられるコーナーや支店長と大阪出身の著名人との対談記事などを掲載しています。

非常時には本店のバックアップを担う

私たちが金融機関を通じて、別の金融機関にある口座にお金を送金する場合、最終的には送金した金融機関と入金される金融機関の間でお金の決済が必要となります。

このとき金融機関は、「日銀ネット」と呼ばれる日銀と金融機関を結ぶコンピュータネットワークを利用して決済処理します。日銀ネットの一日当たりの資金決済額は約一〇〇兆円、日本のGDPの二割に相当する金額です。仮に、このシステムが止まれば、日本中のお金の流れがストップすると言っても過言ではありません。

日銀ネットのシステムは東京都府中市の電算センターに置かれていますが、万が一、大規模災害などにより府中センターが機能しなくなった場合に備え、大阪エリアにバックアップセンターがあります。大阪バックアップセンターと府中センターは常時接続されており、データを同期する仕組みが構築されています。つまり、今この瞬間に府中センターが使えなくなっても、直ちに大阪バックアップセンターへの切り替えを行い、業務を引き継げる体制を取っているのです。

また、円滑な決済を確保するうえでは、金融機関の資金繰りも重要です。大規模災害時に、金融機関が努力を尽くしても資金が不足する場合には、一定の条件の下で、日本銀行は貸付等による資金供給を機動的に実行しますが、本店が機能しなくなったときには、首都圏の金融機関に対しても大阪支店から資金

を供給します。

このほか、日本銀行は、外国中央銀行や国際機関のお金（円資金）を預かるなど、外国中央銀行や国際機関とも密接な関係にあります。大規模災害などにより本店で外国中央銀行や国際機関との連絡が困難になった場合には、海外市場の混乱等を回避するため、大阪支店から日本銀行の被災状況を的確に知らせるなどの業務を行います。

「いざという日」に向けた業務継続計画

もっとも、システムがいくら万全でも、それを動かす人間がしっかりと行動できなければ機能しません。また、日銀本店が被災した場合には、最低限の本部機能をほかの場所において果たしていくことが必要となります。本店が機能しなくなったときには、金融システムの安定のために欠かすことができない仕事を大阪支店が引き継ぎます。

非常時に全職員がなすべきことをまっとうできるか。あらゆる組織が抱える課題です。大阪支店ではその課題にどう取り組んでいるのでしょうか。

業務課企画役の関貴介さんは、府中センターで東日本大震災を経験しました。その体験から「いざというときは日頃の訓練がものをいいます」と強調します。

大阪支店では、日常的に有事を想定した訓練を実施しています。関係者が机上でシミュレーションするレベルのものから、本番さながらにシステムを実際に動かす訓練まで、そのやり方はバリエーションに富んでいます。有事の際には慣れない業務も整斉とこなさなければならないため、訓練は本番さながらのシナリオで経験を積めるようにしています。

日銀ネットを用いた訓練は、平日には実施できないため休日に行います。大阪支店を中心に行うものと、本支店合同のものがそれぞれ年に一回ずつあります。合同訓練は、日銀ネットに接続する金融機関や関係官庁も参加する本番さながらの大掛かりなものとなります。今年は、さる三月九日（日）に実施されたばかりです。

さらに、最近は、シナリオを事前に知らせないまま訓練を行う「シナリオブラインド訓練」も取り入れるようになりました。職員にとっては極度に緊張する訓練ですが、その緊張状態で冷静に動けるか、予告なく直面する事態に適切に対応できるかなど、底力を養うのに非常に有効な訓練となっています。

「やはり人間ですから、大きな災害に直面すると、緊張もすれば舞い上がりもします。その中で自分が今何をしなければならないかを見失わないように訓練しておくことが大切なんです」（関さん）

こうした訓練の積み重ねについて、営業課総務・金融グループ長の戸田博之さんは語ります。

「非常時こそ日本銀行の役割が問われます。日本銀行が機能しなくなれば、金融機関や金融市場には深刻な影響が生じ、経済活動も停滞してしまいます。一人一人の生活にも影響が及ぶでしょう。日本の金融を守ることは、皆さんの生活を守ることだと考えています。いざという日、それぞれの持ち場でその時できる最善のことを行う。そのために日々の積み重ねがあると信じています」

また、業務課の関さんは力強く話します。「大阪支店のメンバー全員が、『本店が機能できなくなった時、日本を支えるのは我々だ』という責任感や矜持を持って仕事に向き合っています」

取材を終え、御堂筋から旧館を振り返った時、取材前に見た明治時代の建物は、周囲の現代的な建物と調和し、それらの重しとして落ち着きを与えていることに気付きました。

休日に実施された日銀ネットの災害対策訓練の模様

日本銀行のレポートから

日本銀行では、年４回（１月、４月、７月、10月）、全国32支店の支店長などが本店に集まり、総裁以下全役員と「支店長会議」を開きます。支店長会議の場では、全国の支店長などが、経済指標の分析や企業等への面談調査等を通じて収集した情報をもとに、各地域の経済金融動向等について報告・討議します。こうした分析・情報に基づく各支店などからの報告を支店長会議にあわせて集約したものが「地域経済報告」（さくらレポート）です。全国を９地域に分け、景気情勢に関する報告を集約した「地域からみた景気情勢」と、その時々のタイムリーなトピックを採り上げ企業等の生の声を収集・整理した「地域の視点」、全国９地域の金融経済概況、参考計表で構成されています。

＊全文は日本銀行ホームページに掲載されています。http://www.boj.or.jp/research/brp/rer/index.htm/

「地域経済報告」（さくらレポート）

――二〇一四年一月［抜粋］――

Ⅰ．地域からみた景気情勢

各地の景気情勢をみると、国内需要が堅調に推移し、生産が緩やかに増加している中で、雇用・所得環境も改善していることを背景に、「回復している」、「緩やかに回復している」等の報告があった。

前回（一三年十月）と比較すると、四地域（東北、関東甲信越、近畿、九州・沖縄）で景気の改善度合いに関する判断に変化はないとしているほか、五地域（北海道、北陸、東海、中国、四国）からは雇用・所得環境に支えられた個人消費の改善等から判断を引き上げる報告があった。

公共投資は、東北、九州・沖縄から、「大幅に増加している」等、

	【13/10月判断】	前回との比較	【14/1月判断】
北海道	緩やかに回復しつつある	↗	緩やかに回復している
東北	回復している	→	回復している
北陸	着実に持ち直している	↗	緩やかに回復しつつある
関東甲信越	緩やかに回復している	→	緩やかに回復している
東海	緩やかに回復している	↗	回復している
近畿	緩やかに回復している	→	緩やかに回復している
中国	全体として緩やかに回復している	↗	緩やかに回復している
四国	緩やかに回復しつつある	↗	緩やかに回復している
九州・沖縄	緩やかに回復している	→	緩やかに回復している

（注）前回との比較の「↗」、「↘」は、前回判断に比較して景気の改善度合いまたは悪化度合いが変化したことを示す（例えば、改善度合いの強まりまたは悪化度合いの弱まりは、「↗」）。なお、前回に比較し景気の改善・悪化度合いが変化しなかった場合は、「→」となる。

六地域（北海道、北陸、関東甲信越、近畿、中国、四国）から、「増加している」、「増加傾向を維持している」との報告があった。また、東海からは、「高めの水準で推移している」との報告があった。

設備投資は、四地域（北海道、東北、関東甲信越、東海）から、「増加している」等、四地域（近畿、中国、四国、九州・沖縄）から、「持ち直している」、「持ち直しの動きが広がっている」等の報告があった。また、北陸からは「底堅く推移している」との報告があった。この間、企業の業況感については、多くの地域から、「改善している」、「広がりを伴いつつ改善を続けている」等の報告があった。

個人消費は、雇用・所得環境が改善していること等を背景に、北海道から、「緩やかに回復している」、五地域（北陸、東海、近畿、四国、九州・沖縄）から、「緩やかに持ち直している」、「持ち直している」等の報告があったほか、関東甲信越から、「底堅さを増しており、都心部では強めの動きとなっている」との報告があった。また、東北、中国から、「底堅く推移している」との報告があった。

大型小売店販売額をみると、百貨店は、多くの地域から、高額品の販売が堅調となっているなど、「持ち直しの動きが続いている」、「堅調に推移している」等の報告があった。スーパーは、複数の地域から、「概ね下げ止まっている」、「持ち直しの動きがみられている」等の報告があった。

乗用車販売は、新型車投入効果や消費税率引き上げ前の駆け込み需要等を背景に、多くの地域から、「増加している」等の報告があった。

家電販売は、節電機能に優れた白物家電が堅調であること等を背景に、多くの地域から、「持ち直しつつある」、「底堅い動きとなっている」等の報告があった。

旅行関連需要は、多くの地域から、「持ち直している」、「堅調に推移している」等の報告があった。この間、複数の地域で、外国人観光客が増加しているとの報告があった。

住宅投資は、消費税率引き上げ前の駆け込み需要等もあって、八地域（東北、北陸、関東甲信越、東海、近畿、中国、四国、九州・沖縄）から、「増加している」等の報告があった。一方、北海道からは、「持ち直しの動きが鈍化している」との報告があった。

生産（鉱工業生産）は、国内需要が堅調に推移しているほか、海外需要も緩やかに持ち直していることを背景に、五地域（北海道、北陸、関東甲信越、近畿、中国）から、「緩やかに増加している」等の報告があったほか、東北、四国から、「持ち直している」等の報告があった。また、東海からは、「高めの水準で推移している」との報告があった。この間、九州・沖縄からは、「緩やかな増加の動きに一服感がみられる」との報告があった。

業種別の主な動きをみると、輸送機械は、「高めの水準で推移している」、「増産している」等の報告があった。鉄鋼、化学は、「高操業を続けている」、「横ばい圏内の動きとなっている」等の報告があった。また、はん用・生産用・業務用機械でも、「持ち直している」等の報告があった。金属製品、窯業・土石についても、「増加している」等の報告があった。この間、電子部品・デバイスは、「持ち直している」等の報告があった一方、「増勢が一服している」等の報告もみられるなど、区々の動きとなっている。

雇用・所得動向は、多くの地域から、「改善している」等の報告があった。

雇用情勢については、多くの地域から、「労働需給は改善している」等の報告があった。雇用者所得は、九州・沖縄から、「概ね横ばい圏内となっている」との報告があった一方、五地域（北海道、関東甲信越、東海、近畿、四国）から、所定外給与や賞与の増加等を背景に、「改善の動きがみられている」、「持ち直しの動きがみられている」等の報告があった。

Ⅱ．地域の視点
「各地域における最近の雇用・賃金動向」
――人手不足感が強まるもとでの企業の対応

1．地域からみた最近の雇用・賃金動向

最近の各地域の雇用・賃金動向をみると、労働需給が全国的に改善傾向にあるほか、賃金についても都市圏を中心に持ち直しの動きがみられている。この間、有効求人倍率は、北海道、東北、北陸、四国、九州・沖縄ではリーマン・ショック前を上回る水準となっている。

2. 各地域の労働需給の現状とその背景

(1) 需要(求人)サイドの動向

求人動向をみると、求人数は非製造業が引き続き増加していることに加え、製造業でも増加に転じている。

非製造業は、非正規労働者が中心ながら、幅広い業種で求人が増加している。堅調な内需を背景に建設や個人消費の関連業種の求人が多くの地域で増加しているほか、医療・福祉、運輸、IT関連、金融などの幅広い業種においても、即戦力重視の中途採用に加え、新卒採用も積極化する動きがみられている。

また、製造業では、一部の電気機械等で国内生産体制の縮小・再編を図る動きが継続しているものの、自動車等で増産対応のための期間従業員等を大量採用しているほか、スマートフォン向け電子部品等でも採用を増やしている。このほか、省エネ技術など成長分野への投資や事業領域拡大に向け、技術系を中心に正社員の採用に注力する動きもみられている。

(2) 供給(求職)サイドの動向

一方、求職動向をみると、企業の雇用調整圧力が弱まる中で、求職者の就職が進展していることから、求職者数は全体として減少傾向にある。加えて、団塊世代の本格退職や少子化の進展で労働力人口が減少しているほか、若年層の能力開発の遅れ、就業意欲の低さなど求職者の質の低下を指摘する声も少なくなく、労働供給余力の低下を懸念する声も聞かれ始めている。

この間、最近の特徴として、在職者がより良い労働条件やキャリアアップを求めて転職活動を行う動きや、主婦や無業者が求人企業側から提示される就労条件の多様化や職種の増加に触発されて求職を始める動きが活発となっている。

3. 人手不足感の強まりと企業の対応

(1) 人手不足感の強まりと事業活動への影響

こうした労働需給を反映して、業種や企業規模、地域を越えた人材獲得競争が激化しているほか、様々な雇用ミスマッチも顕在化しており、一部の企業からは必要な人員を確保できないといった声が聞かれるなど、企業の人手不足感が強まっている。特に、賃金や就労条件でミスマッチの大きな業種・職種や、知名度・待遇面で大企業に見劣りする中小企業などでは、人材確保が困難化しており、時間外労働や休日出勤等で凌いでいるとの声が強まっている。

また、建設、医療・福祉、小売、製造業等で必要な人材を確保できず、工期の遅延や事業の縮小、新規出店計画の見直し、受注・生産の制限等を余儀なくされるなど、人手不足が事業活動のボトルネックになる事例がみられ始めており、特に東日本大震災の被災地等では顕著となっている。

(2) 企業の対応

こうした状況下、人手不足感の強い業種を中心に、求職者の実情に合わせて採用要件を緩和・弾力化する動きや、未経験者の資格取得支援などを前提とした育成型採用に転換する動きが広がっている。このほか、非正規労働者の正社員化により現有戦力を一層活用する動きや、就労条件の多様化により従業員の定着促進を図る動きも進みつつある。

また、女性、高齢者、外国人の活用を積極化・多様化する動きが広がっている。すなわち、女性については、女性のニーズを意識した営業・研究開発分野などでの活用、管理職への登用が進みつつある。高齢者に関しては、技能継承を企図して定年後も継続雇用する動きが広範化していることに加え、雇用期間の再々延長や退職後の復職雇用を図るなど、労働力としてなお依存せざるを得ない状況もうかがわれる。外国人についても、製造業の増産要員に加え、インバウンド観光対応や海外事業強化などを企図して、戦略的に外国人留学生や現地採用者を活用する動きが広がっている。

この間、公的機関や民間企業等では、雇用ミスマッチの改善に向けて、求職者に対する支援の一層の充実を進めている。

4. 各地域の賃金動向

賃金動向をみると、正社員の定例給与を改定して賃金を引き上げる動きは、現時点では一部にとどまっている。もっとも、時間外給与については、製造業の生産回復や非製造業の人手不足を補うために増加しているほか、冬季賞与についても、企業業績の改善に伴い増額する動きが地

域・業種を問わず広がっている。また、非正規労働者の時給については、建設労働者やシステムエンジニア、小売、宿泊・飲食サービスのパート・アルバイト、製造業の期間従業員等で、労働需給の引き締まりや最低賃金の改定等を背景に上昇しているとの指摘が聞かれている。この間、直接的な給与支給だけでなく、福利厚生の拡充・復活により処遇を改善する動きもみられている。

5. 先行きの見通し

先行きの雇用についてみると、経営合理化を進めている製造業や消費増税後の反動減の影響を懸念する企業の一部では採用抑制姿勢をみせているものの、新規出店要員の確保や団塊世代の退職者補充、技能継承の必要もあって、採用を積極化する企業が増加していることから、当面は労働需給の改善傾向が続くとの見方が多い。

賃金の引き上げについては、景気回復の持続性や他社の動向を見極めたい、あるいは固定費の増加は回避したいなどとする声が多い一方で、従業員の士気向上や人材確保等を目的に、何らかの形での対応を前向きに検討する動きも広がりつつある。

〈需要項目等〉

	公共投資	設備投資	個人消費	住宅投資	生産	雇用・所得
北海道	各種経済対策を受けて増加傾向を維持している	景気が緩やかに回復する中、売上や収益の改善を受けて、増加している	消費者マインドの改善に雇用環境の緩やかな改善も加わり、緩やかに回復している	持ち直しの動きが鈍化している	国内外需要の増加を背景に、緩やかに増産している	雇用・所得情勢をみると、労働需給は改善している。雇用者所得は、幅広い業種で所定外給与や冬季賞与が増加するなど持ち直している
東北	震災復旧関連工事を主体に、大幅に増加している	増加している	底堅く推移している	震災に伴う建て替え需要等から増加している	持ち直している	雇用・所得環境は、改善している
北陸	増加傾向を維持している	製造業を中心に底堅く推移している	緩やかに持ち直している	増加している	着実に増加している	雇用・所得環境は、持ち直している
関東甲信越	増加している	非製造業を中心に増加基調にある	底堅さを増しており、都心部では強めの動きとなっている	消費税率引き上げ前の駆け込み需要等から、増加している	緩やかに増加している	雇用・所得情勢は、労働需給面で改善しているほか、所得面でも持ち直しの動きが続いている
東海	高めの水準で推移している	一段と増加している	持ち直している	増加している	高めの水準で推移している	雇用・所得情勢は、改善している
近畿	増加している	持ち直しの動きが広がっている	消費者マインドの改善などから、緩やかに持ち直している	増加している	緩やかに増加している	雇用情勢をみると、労働需給は改善している。こうしたもとで、雇用者所得も改善の動きがみられている
中国	増加している	非製造業を中心に持ち直している	底堅く推移している	増加している	緩やかに増加している	雇用情勢をみると、緩やかに改善している。雇用者所得は、弱めの動きとなっているものの、持ち直しに向けた動きが広がっている
四国	増加している	持ち直している	緩やかに持ち直している	増加している	緩やかに持ち直しつつある	雇用・所得情勢については、労働需給は改善しており、雇用者所得にも持ち直しの動きがみられている
九州・沖縄	大幅な増加を続けている	非製造業を中心に持ち直している	消費者マインドの改善などから、持ち直しの動きがみられている	低金利を背景とした潜在需要の掘り起こしに加えて、消費税率引き上げ前の駆け込みもあって、着実に増加している	一部で生産体制の見直し等の影響もあって、緩やかな増加の動きに一服感がみられる	雇用・所得情勢は、厳しい状態が続いているが、労働需給面では、非製造業を中心に改善している

新日銀ネット第一段階開発分の稼動開始（二〇一四年一月）

▼日本銀行は、二〇一四年一月六日、新日銀ネット第一段階開発分の稼動を開始しました。

【日銀ネットの概要】

▼日銀ネットは、正式名称を「日本銀行金融ネットワークシステム」といい、日本銀行とその取引先金融機関との間の資金や国債の決済をオンライン処理により安全かつ効率的に行うことを目的として構築された、日本銀行が運営しているネットワークのことです。基幹的な決済システムとして、一九八八年に稼動を開始して以来、約二五年にわたり、わが国金融市場において重要な役割を果たしてきています。

【新日銀ネットの構築】

▼この日銀ネットについて、日本銀行では、金融のグローバル化や情報技術革新の進展といった環境変化の下で、わが国決済システムの安全性・効率性を一層向上させる観点から、システム基盤や対象業務・機能を抜本的に見直し、「新日銀ネット」として新たなシステムを構築することとしました。

新日銀ネットの開発は二段階に分けて行っており、このうち金融市場調節（オペレーション）と国債の入札関連業務および国債系オペレーションなどの受渡関連業務を対象とする第一段階開発分について、予定どおり二〇一四年初に稼動を開始しました。

現在は、二〇一五年秋から二〇一六年初を予定している第二段階開発分の稼動（新日銀ネットの全面稼動）に向けて、準備を進めています。第二段階開発分は、当座預金決済や国債振替決済をはじめとする幅広い業務を対象としています。日本銀行では、取引先金融機関など関係者の方々と協力しながら、今後も着実に開発関連作業を行っていきたいと考えています。

※詳細は、日本銀行HPの「新日銀ネット」のコーナーをご覧ください。

二〇一三年十一月より、新しい「国庫金のOCR事務」をスタート

▼日本銀行は、全国の金融機関（約四四〇先）とともに、国の税金や社会保険料などの「国庫金」の受入事務を取扱っていますが、二〇一三年十一月二十五日より、国庫金の受入事務（OCR事務）の一部を見直しました。

【国庫金のOCR事務とは】

▼国民や企業などから金融機関に持ち込まれる国庫金の受入件数は、年間一億四千万件程度あります。このうち六五〇〇万件弱は、紙の証票を使って店頭窓口で納付されています。

日本銀行では、全国の金融機関から集められた証票と現金を受け取り、証票を電子データ化するOCR（光学式文字読み取り）処理を行い、政府預金に入金しています。

【事務見直しの内容】

▼日本銀行では、こうしたOCR事務に使うシステムの更新の機会を捉えて、事務の一部を見直すこととしました。

具体的には、第一に、近年の物流機能の発展を踏まえ、これまでは、地域金融機関等の一部店舗が同地域にある金融機関の取扱った証票や現金を取りまとめたうえで日本銀行に持ち込むといった流れとしていましたが、これを取り止め、証票や現金を取扱った金融機関が直接日本銀行に持ち込むこととしました。

第二に、従来、日本銀行のすべての本支店で各地域にある金融機関の取扱った証票のOCR事務を行っていましたが、一部の支店（二六店舗）については、これを取り止め、七つの本支店に事務を集約しました。各地域にある金融機関の取扱った証票や現金は、これらの七つの本支店に送られることとなります。

【金融機関との「対話」】

▼新しい事務を始めるに当たっては、全国の金融機関の実務への影響等も考慮し、約三年半をかけて全国の金融機関と意見交換を行いながら、実施に移しました。

今後も、こうした実務について金融機関としっかりコミュニケーションしながら、国庫金事務などの効率化を図っていきます。

日本銀行本店本館を舞台にドラマ撮影

▼二〇一四年一月に、国の重要文化財である日本銀行本店本館で、ドラマ撮影が行われました。

ドラマのストーリーは、日本で国産自動車産業を育てたいとの夢に向けて奔走する企業家の挑戦です。日本銀行は、その夢が潰えそうになったとき、日本経済の発展を支えるため、銀行団による協調融資を取りまとめるなどの役割を果たします。

日本銀行がドラマ撮影に協力することは近年なかったことです。このドラマは、昭和二十年代に在職した一万田総裁の実話をもとにした話であるうえ、金融政策遂行の難しさなど、現在に通じるところも含まれており、日本銀行に親しんで頂ける一助となったなら幸いです。

ドラマ（「リーダーズ」、TBS 系列で 2014 年 3 月に放映済み）の撮影の模様（左から、総裁役・中村橋之介さん、名古屋支店長役・香川照之さん、アイチ自動車工業社長役・佐藤浩市さん）

「第九回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」の決勝開催

▼日本銀行では、昨年十一月三十日、大学生を主な対象とする金融経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第九回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」の決勝を本店において開催しました。

▼今回はわが国の金融に関するテーマについて、全国の三九大学から計一二〇編の論文が寄せられ、一次審査（書類審査）の結果、五チームが決勝に進出しました。

▼決勝当日は、各チームがそれぞれ一五分間のプレゼンテーションを行った後、審査員からの質問に答えるかたちで進められました。

審査員には、柏木斉氏（経済同友会副代表幹事・リクルートホールディングス取締役相談役）、石黒不二代氏（ネットイヤーグループ代表取締役社長 兼 CEO）をお招きしたほか、日本銀行から岩田規久男副総裁（審査員長）、佐藤健裕、木内登英両審議委員が参加しました。

▼審査の結果、最優秀賞には、武蔵大学チームの「被災企業訪問から考える、被災企業救済の新たなスキームの提案 ～災害に強い国づくりファンド～」が選ばれました。本提言は、東日本大震災の経験を糧として、民間資金を主体とする被災企業支援ファンドおよび情報提供等を行う支援機関を創設するというものです。このほか優秀賞（東京理科大学、東京経済大学）、敢闘賞（立教大学、福島大学）を選出しました。

▼審査員から、「わが国の金融に関して健全な問題意識を持ち、現状の問題点や課題を把握した上で、それを補強するためのアンケート調査や実務家への聞き取り調査を行っていた。こうした地道な取り組みを通じて、独りよがりにならず、地に足の着いた提言に結びつけている点は高く評価できる」との講評がありました。

▼日銀グランプリについては、日本銀行ホームページに専用コーナーを設けて、概要、決勝参加チームの発表論文全文および審査員講評等を紹介しています。また、同コーナーや YouTube では、今回の決勝大会の模様を収録した動画（三分程度）も配信しています。

▼日本銀行では、二〇一四年度も日銀グランプリを開催する予定です。たくさんのご応募をお待ちしております。

趣向をこらしたプレゼンテーションを展開

決勝進出チームの皆さん・審査員を囲んで

「日本銀行見学等」のご案内

▼日本銀行では、重要文化財に指定されている本店本館（旧地下金庫エリア、旧営業場、史料展示室）および新館（一階営業場）などの見学案内を行っています。また、日本銀行の仕事や建物、貨幣の歴史などをテーマにしたレクチャー付見学も定期的に開催しています（無料）。

＊詳細は、日本銀行HPの「広報イベント・見学等」のコーナーをご覧ください。

▼ご希望の方は、見学希望日の三カ月前から一週間前までに、電話でご予約ください。

【申込先】

情報サービス局（見学受付）

〇三―三二七七―二八一五

（九時半～十六時半（月～金））

旧地下金庫エリア

史料展示室の模様

▼本店のほか、全国の支店でも、随時見学を行っております。支店ごとに予約方法が異なりますので、お手数ですが、見学をご希望する支店のHPで、予約方法をご確認ください。

▼また、金融研究所貨幣博物館（①）、旧小樽支店金融資料館（②）は、ご予約なしでご見学いただけます（ただし、二〇名以上は要予約）。

＊最新の開館情報は、各HPをご覧ください。

①http://www.imes.boj.or.jp/cm/

②http://www3.boj.or.jp/otaru-m/

▼多くの方のお越しを、お待ちしております。

編集後記

■熊本県の営業部長「くまモン」が１月６日付で「しあわせ部長」を兼務しました。「自分たちが気付かなかった価値を再発見し、それを多くの人に伝えていく。そして自分たちの日常もより豊かにしていく」。小山薫堂氏の思いが、これからどのように地域に根付き、更に新しい魅力を生み出していくのか、今後の展開が楽しみです。

小山氏にはお金を題材にした「勝手にテコ入れ」も行って頂きました。お金に込められた思い、感謝を大切にしていく、まさしく私ども日本銀行情報サービス局が金融広報中央委員会事務局として推進している「金融教育」の大事なポイントです。お金の面から「生きる力」、「自立する力」を育むのが金融教育です。小山氏のお話も参考にし、子供から大人まで共感を得ながら「お金の知恵」を広めていければと思っています。

ちなみに、今回「地域の底力」で訪れた近江八幡市。こちらでは住民が、埋め立てからお堀を守り、水郷を守ったことが、今の観光の街造（まちづく）りの原動力になりました。「いいものを守ればおのずと商いになる」。小山氏のメッセージとも通じる取り組みでした。（丹治）

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。（http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/）

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ（http://www.boj.or.jp/）をご覧ください。

にちぎん　2014年春号
編集・発行人　丹治芳樹
発行　日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405

デザイン　株式会社市川事務所
印刷　サンメッセ株式会社
©日本銀行情報サービス局　禁無断転載

＊本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。

from London

過去と未来が息づくロンドン

今も残る昔の街壁、London Wall

金融街として知られるシティ・オブ・ロンドン（The City of London、通称「シティ」）はロンドン中心部にあり、広さが約1平方マイル（1マイル≒1.6㎞）のためスクエア（平方）マイルとも呼ばれます。イングランド銀行をはじめとする古い建造物が建ち並ぶ一角は、過去にタイムトリップしたような印象を受けます。

シティは中世時代に王政の権力に対抗する自由都市として発展しました。周囲には街壁（ロンドンウォール）が築かれ、英国王ですら市長の許可なく立ち入ることができないほどの独立性を得たと言われます。その街壁の一部は現在もなお残り、ロンドン中心部には往時の外観のまま補修維持して使い続けられている建物が数多くあります。

こうしたシティに代表される古きを良しとするロンドンでも、近年、街並みが変わりつつあります。ロンドン東部のカナリーワーフ地区では、90年代以降、大規模な再開発が行われ、シティからも多くの金融機関が移転しました。超高層ビルが建ち並ぶ光景は見る人を圧倒しています。

さらにロンドン中心部でも各所で再開発が進み、超高層ビルが建てられるようになっています。昨年は西ヨーロッパ一の高さ（310メートル）を誇る複合ビル「ザ・シャード」が開業しました。ザ・シャードは複数の面が天高く伸びるデザインが印象的です。そのほかにも近未来的で斬新なデザインの高層ビルが建てられており、その形状から「ガーキン」（小きゅうりのピクルス）や「ウォーキー・トーキー」（トランシーバー）のように個性的な愛称でロンドン市民に親しまれています。本年央には、「チーズ・グレーター」（チーズおろし器）のようなビルが竣工する予定です。

このようにロンドンは中世時代の面影を残しつつも、近未来を感じさせるデザインの超高層ビルも増えており、過去と未来が息づく街として進化を続けています。

（日本銀行ロンドン事務所）

＊本コーナーは海外で働く日本銀行職員または日本銀行からの出向者が執筆しています。

西ヨーロッパ一高いビル、ザ・シャード

チーズ・グレーター（左）とガーキン（右）

にちぎん　第一〇巻　第一号　通巻三七号　平成二十六年三月二十五日発行

にちぎん

ISSN 1880-0327